

放課後児童クラブにおける日報の特徴と
その在り方に関する研究

-彦根市 T 放課後児童クラブを対象として-

辻 雅人

環境政策・計画学科において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2011 年度

承認

指導教員

放課後児童クラブにおける日報の特徴とその在り方に関する研究

-彦根市 T 放課後児童クラブを対象として-

近藤研究室 0812025 辻雅人

1. 放課後児童クラブおよび日報の背景・論点

(1)放課後児童クラブの背景

放課後児童クラブとは放課後に親の代わりとなって保育・教育を行う事業・施設の事であると定義されており¹⁾、また、放課後児童クラブ指導員は、児童の成長のための専門的な能力や知識が必要とされている²⁾。しかし実際は、活動方針や指導員になるための条件について、共通して定義されておらず、それらは各市町村等に任せられている。それによって①指導員の意識や能力の統一がされていない問題、②情報共有の不足の問題、③行政の協力体制の問題、の3つの課題点が生じている³⁾。

しかし、先行研究では放課後児童クラブそのものや、保護者との関わり方、児童にとっての放課後児童クラブの位置づけなどについての実態調査が多い⁴⁾。そこで本研究では、指導員の活動方針の定義付けの基盤となり得る「日報」に注目した。

(2)放課後児童クラブにおける「日報」

「日報」とは、児童の様子や特記事項を記録したものであり、行政に対する報告や指導員間の情報共有が主な目的である。放課後児童クラブが定期的に行政に日報を提出し、市役所は児童の安全や保護者からの意見等を確認して返却している(図1)。

他に、指導員の仕事の確立や能力の向上、保育の見通しを立てることも日報を用いる意義としている⁵⁾。しかし、市役所との日報のやり取りの方法や期間が明確化されておらず、指導員間で日報を用いて情報共有していることが主となっていないことから、指導員や行政からは「日報」は軽視されがちとなっている現状である⁶⁾。

図1 T放課後児童クラブで使用されている日報の例

(3)教育現場における日報

小学校や大学といった他の教育現場の日報でも、放課後児童クラブと同様に、情報共有や指導の見通し等の使われ方をしている。そこで、放課後児童クラブを対象として分析し、児童の状況や指導状況、課題点を整理して今後の指導に役立てる日報の提案は、他の教育の現場でも活用できると考える。

また、学生の実習記録を対象として、記述者の育成という目的で論じられている先行研究はあるが本論の目的に類するものは見受けられない⁷⁾。

2. 研究の目的・意義

本研究の目的は以下の2点である。

- ①放課後児童クラブにおける日報の持つ情報量や性質について把握する。
- ②現場での放課後児童クラブの日報の活用方法を見出す。

本研究の意義は、以上の目的を達成することで、放課後児童クラブにおいて、日報の情報の特徴を明確化し、教育現場において、現状を把握しやすく、かつ指導員同士での情報共有を促す日報を提案することである。歴史の浅く前例の少ない授業では、各授業での細かい評価が必要であり、特に座学より体験学習の様なプログラムが多い環境教育の場合、授業後の児童の理解度合いを測るために普段の生活を観察することができる「日報」を考案することが重要である。

3. 研究方法

(1)研究対象の選定

著者が児童や指導員の様子を観察でき、ヒアリングを頻繁に行えるという点、対象とする児童クラブでは、指導員が児童の教育に力を入れている点から、対象地を滋賀県彦根市 T 放課後児童クラブとする。

また、彦根市に在る 17 ヶ所の放課後児童クラブ(表1)の日報は全て同じ形式であるため、T 放課後児童クラブの日報を分析した結果は、他の放課後児童クラブにも応用できるものと考えられる。

表2 彦根市内の放課後児童クラブ一覧

名称(放課後児童クラブ)	所在地	規模(目安)
城北小学校	松原町 3751-3	20 人
鳥居本小学校	鳥居本町 1550-1	40 人
城西小学校	本町三丁目 3-22	40 人

城東小学校	京町二丁目 2-19	40 人
金城小学校	大藪町 391	80 人
佐和山小学校	安清町 11-32	70 人
平田小学校	平田町 267	40 人
旭森小学校	東沼波町 455	90 人
城南小学校	西今町 383	130 人
城陽小学校	甘呂町 430	30 人
高宮小学校	高宮町 2447	70 人
若葉小学校	蓮台寺町 180	50 人
河瀬小学校	極楽寺町 118	60 人
亀山小学校	賀田山町 8	30 人
稲枝北小学校	下岡部町 597	40 人
稲枝東小学校	稲部町 308	60 人
稲枝西小学校放	本庄町 3583	40 人

(2)日報分析

①日報分析手順

入学してから 1 ヶ月経過して、1 年生が児童クラブに慣れ出してから、夏休み期間でのグループワークを経て、まとまりが見えてくる 10 月までの 2010 年 5 月～2010 年 10 月の半年間を調査対象期間とする。

日報に記載されている言葉から、指導員の視点から見た放課後児童クラブの情報を把握するために、以下の手順で日報の分析を行う。

1. 日報に記載されている言葉ごとに、話題をカテゴリ分けする。(表 2)
2. 月ごと、また、1 ヶ月を 3 分割したもの(6～7 日間)ごとで、カテゴリ間の繋がり(話題想起率)を算出し、話題相関図を作成する。
3. 記載された文章のテーマ(個人についての記述・全体の雰囲気についての記述、男女の出現率など)を分類する。

②話題分類

分類するカテゴリは以下の 9 つとする。

表 3 カテゴリ説明

カテゴリ	説明	具体例
指導・注意	注意や指導	指導した・注意
遊び	遊びの内容	ブランコ・泥遊び
約束事	約束を守らない行為	机の上に乗る
生物・植物	生物植物の名前	バッタ・カエル
対人トラブル	対人での事象	喧嘩・取り合い
褒める表現	ポジティブな表現	落ち着いてきた
しかる表現	ネガティブな表現	イライラ
食	食に関連したもの	おやつ
その他	その他	

③話題相関図

以下の式で話題想起率⁸⁾を算出する。また、話題相関図は、1 ヶ月単位で見られない細かい変化を見るために、月ごとに分けた期間と、1 ヶ月を 6～7 日に 3 分割した期間で作成していく。

ある話題の話題想起率 (%)

$$= \frac{\text{ある話題が出現した回数(話題出現数)}}{\text{全記事数}} \times 100$$

(3)ヒアリング

作成した話題相関図を、2011 年 11 月 29 日に去年在籍している対象児童クラブ指導員に見せながら、基礎情報の補足や日報を読む上で必要になってくる情報についてヒアリング調査を実施した。

4. 結果および考察

(1)個人の出現率

対象とする放課後児童クラブの出現回数を集計したところ、日報上に 1 度も出現していない児童が約 3 割、1 回出現した児童が約 2 割、出現回数が 0～1 回の児童が半数以上いた。しかし、1 割程度の児童は 10 回以上出現しており、もっとも出現回数の多い児童で 17 回にのぼった。10 回以上出現している児童は全員男子であり、3 年生が多く、喧嘩やトラブルを起こす頻度の高い児童であった。また、女子児童の出現数が極めて少ないことも特徴的であった。

全文章に対して個人が出現した割合は 3 割程度であり、日報上の記述のほとんどが児童クラブ全体としての評価に関する内容であることが分かる。

以上より、各児童に対しての指導の見通しや状況を記述する研究目的から見ると、日報の形式を再考すべきだと考えた。

(2)話題ごとの単純集計

集計期間内のカテゴリの総出現数を見たところ、「しかる表現」が最も多く、「指導・評価」、「遊び」、「褒める表現」の順で多い(図 2)。



図 2 2010 年 5 月～10 月各カテゴリの出現回数

また、月単位での各カテゴリーの出現数の変遷を見てみると、8月を除くと全体的に話題数が減少していることが分かる。8月は1日保育のため、通常の記事内容よりも、全体を通しての報告事項が多く、その結果、他の月に比べて使われた言葉の種類が少ない。

(3)カテゴリー内の単純集計・出現数の変遷

カテゴリー内の単純集計を行ったところ、「しかる表現」、「褒める表現」に顕著な特徴が見られた。「しかる表現」では『落ち着かない』や『ふざける』等、指導員が一見して分かる事象について多く記述される傾向がある。「褒める表現」では『楽しむ』の出現数が非常に多い。これだけ見ると指導員が評価しきれない印象を受けるが、実際の様子を見てみると、指導員は細かい観点で児童を評価している。これは、日報に載る「褒める表現」に偏りがあることが原因であると考えられる。偏りがある理由として、褒める事象を細かく書いていく余裕がないこと、児童の成長を感じたり、良いことをしたことを記述する内容より、喧嘩やルールを破った出来事の記事の方を優先してしまうことが挙げられる。また、「褒める表現」の出現数の変遷では、「ほめる表現」が多い時期は「しかる表現」が少なく、「褒める表現」が少ない時期は「しかる表現」が多い(図3)。しかし、実際に指導員として放課後児童クラブで観察していると、放課後児童クラブでは、トラブルの発生頻度と同程度で、褒める表現が用いられるような事象が起きている。

以上のことから、指導員は、日報内での児童の評価を、数日間を単位として行い、「褒める表現」と「しかる表現」の出現頻度のバランスを取ろうと記述していると推測される。

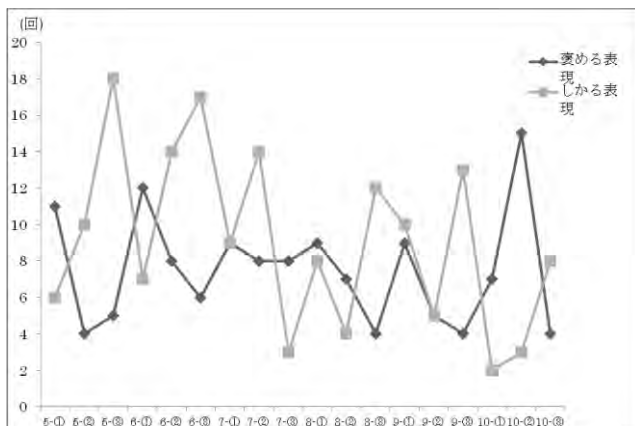


図3 「褒める表現」「しかる表現」比較

(4)話題相関図

①5月下旬・9月中旬・10月

5月下旬の指導員と教師の話し合い、9月中旬の運

動会や音楽会、10月の遠足、と学校生活で変化の多い時期には、児童はストレスや疲労を溜めて児童クラブに帰ってくるため、児童クラブ全体的に落ち着かず、トラブルが増える。それは、「しかる表現」の出現数が多いことや、また「しかる表現」と「約束事」や「遊び」に強い相関が出ていることから分かる(図4)。

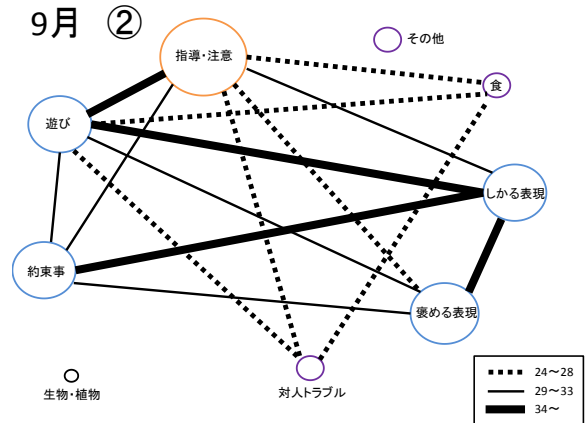


図4 9月9日～9月16日の6日間の話題相関図

②6月・9月下旬

運動会や音楽会の様に継続的に児童の生活に変化が起きる時期が終わり児童が慣れ始める6月と9月下旬には、1つの事例の説明の分量が多く、個人の記述が、じっくり評価考察している傾向がある(表3)。これは、通常のリズムの生活に戻ることで、児童の気持ちが緩んでいることを指導員が危惧して記述に残していることが原因であると推測する。

表4 9月 個人を表記した文章の出現回数

	全文章	個人を表記した文章	男(回)	女(回)
9月	89	30	46	5
9月①	28	5	9	2
9月②	29	6	13	2
9月③	32	19	24	1

③9月中旬・7月

9月中旬や7月の夏休み前は、他の時期に比べて特に児童が落ち着かなかつたり、トラブルが生じた時期であり、その時期には特に、「しかる表現」と「褒める表現」に強い相関が見られる(図5)。そこから、指導員が、児童の悪い評価だけでなく、良い評価もしようとしていることが分かる。

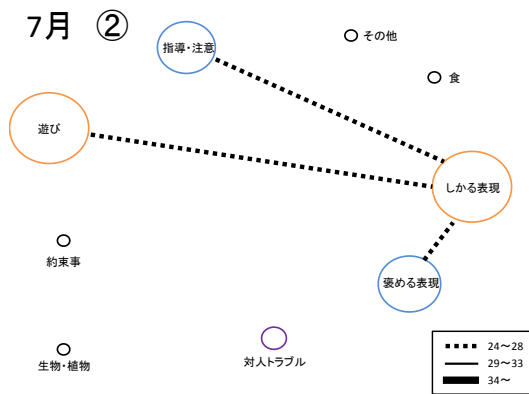


図5 7月12日～7月21日の7日間の話題相関図

5. 結論

(1)市役所と現場での求める日報のずれ

市役所が求める情報は、児童クラブ全体としてどのような雰囲気や活動で、どのような指導をしているのかといった保護者から来る質問や意見に対応できる範囲の情報である。それゆえ、指導員の能力の向上や児童の保育の見通しを立てるために必要な情報を記述する優先順位は低くなる傾向がある。

市役所の求める日報と、実際に働いている指導員が求める情報にはずれが生じている。

(2)指導員にとってより良い日報の要素の提案

そこで、行政の定める日報に補足する形で、指導員間の情報共有用のツールの提案ができると考えた。付加する情報として、①各児童に対する評価、②指導した方法と児童の対応の2点を考えた。

①は、現状や問題を整理分析することで今後の保育の見通しをつかんでいくためのもの、②は指導員の仕事を確立していくためのものである。これらの情報を、行政の定める日報にそれぞれ加え、児童クラブで実践しやすい日報の作成を提案する。

図6は三重県の「かんたろう学童保育⁹⁾」の日報を参考に作成した日報のフォーマットである。

日報の項目は、縦軸に全ての児童の名前を、横軸に「おやつ」や「外遊び」など、時間軸に沿って気付いたことを気付いたときに記述していく。また、その日の指導員全員で、記載すべき児童についてのみ記述していく。

また、日報上で共有できない情報に関しては、定期的にミーティングを行い、指導員全員で児童に対する情報を共有していくことが望ましいと考える。

	宿題	児童の反応・評価	おやつ	児童の反応・評価	...
児童①	記述欄	記述欄			
児童②	記述欄				
児童③					
...					

図6 日報のフォーマット 提案

(3)本研究の限界と課題

本研究の分析方法(話題分類)は、筆者の主観で行うしかない。基準を設けても主観が抜けきらず、いつ・誰が行っても同じ結果が出るとは限らない。第三者の立場で行える分析方法の検討が必要である。

また、本研究の対象は、彦根市の放課後児童クラブのみであった。他地域での日報を調査対象に含め、日報で用いられている項目の違いによる比較考察を行うことが望ましい。

6. 参考文献

- 1) 全国学童保育連絡協議会 <<http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/>>, 2011-9-10
- 2) 厚生労働省発表 放課後児童クラブガイドラインについての報告書 <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/10/dl/h1019-3a.pdf>>, 2011-9-10
- 3) 川崎敦子, 2011-09-06, 私信
- 4) 森洋子: 学童保育における指導員の専門性 K 市学童保育の実践から, 岐阜女子大学紀要, 37, pp.71-79 (2008)
- 5) 全国学童保育連絡協議会: 第36回全国学童保育指導員学校西日本滋賀会場受講のしおり, 2011-6-25
- 6) 川崎敦子, 2011-09-06, 私信
- 7) 権藤真織: 保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連 - 学生自身による日誌の内容分析学習を通して, 近畿大学豊岡短期大学論集, 4, pp.39-47 (2007)
- 8) 近藤隆二郎, 玉井郁圭: 着物着用者のブログにおける話題の相関と変遷に関する研究-衣服を基にした消費生活の見直しを目指して-, 第38回環境システム研究論文発表会演習, pp.425-432 (2010)
- 9) 吉村政子, 2011-11-07, 電話

Research on the feature and the state of the daily report in clubs for after school activities for children

-Be aimed at the Hikone T clubs for after school activities for children.-

Masato Tsuji

1. Clubs for after School Activities for Children Background and Point of Argument of Daily Report

(1) The definition by a national after school juvenile liaison council

Clubs for after School Activities for Children expressed that they are the enterprise and institution which serves as instead of parents and performs child care and education after school.

(2) The subject point of clubs for after school activities for children

Now, an action policy is not defined in common but it is left to each cities, towns and villages.

Three subject points have arisen by it. It is "The problem which neither Instructor's consciousness nor Unification of Capability is Made", "The problem of the shortage point of information sharing", and "The problem of the cooperation organization of administration".

(3) Clubs for after School Activities for Children instructor's role

Clubs for after School Activities for Children instructor is both living, him cultivating children's independency, and sociality and creativity to a child, and helping independence, and the special capability and knowledge for a child's growth are needed.

(4) The "daily report" in clubs for after school activities for children

A "daily report" records a children's situation, a phenomenon which should be mentioned especially, etc., and is the purposes with main information sharing between the report and instructor to the administration. Clubs for after school activities for children submitted the daily report to administration periodically, and the city office checked the opinion from a guardian, etc. about whether the child is living safely, and has returned.

To others, "Establishment of an instructor's work, and improvement in capability", and "The prospect of childcare is stood" are defined as a meaning which uses a daily report.

2. The purpose and meaning of research

The purpose of this research is the following two points.

①It grasps about the amount of information and the character which the daily report in clubs for after school activities for children has.

②The practical use method of the daily report of the clubs for after school activities for children in the spot is found out.

The meaning of this research is that clarify the feature of the information on a daily report and it is shown in clubs for after school activities for children that it is effective as a future candidate for investigation. And at schools, it is becoming a daily report which is easier to grasp the present condition and easy to share instructors.

Moreover, when it thinks at other schools and is environmental education with many programs of experience study, a usual life is observed to measure an understanding of the child after a lesson, and the daily report to evaluate is important.

3. Method of research

(1) Selection of an object place

An author can observe the appearance of a child or an instructor and let an object place be the "Shiga, Hikone City T clubs for after school activities for children" from the point that the instructor is putting power into children's education at the point that a hearing can be performed frequently, and the target club.

(2) Daily report analysis

1) Daily report analytic procedure

The following procedures will analyze an analysis period as October, 2010 from May, 2010.

①The category division of the subject is carried out for every language indicated to the daily report.

②To every one month and things that divided one month into three, a cross tabulation and a subject share of mind are taken out between categories, and a subject correlation diagram is created.

③The theme of the indicated text is classified. (It is whether the individual is described or the whole atmosphere is described, and man and woman's appearance ratio etc.)

2) Subject classification

The category which should be classified is set to following nine. There are "Instruction and cautions", "personal trouble" and "expression to praise" / "appropriate expression" "play" and "predefined significance" -"living thing and plant" - "food" - "others".

3) Subject correlation diagram

The cross tabulation of the subject of a daily report is

classified and carried out. The number of appearing simultaneous between two subjects by it is known. However, since the difference of the number of subject appearances of categories cannot be considered now, relation of subjects is investigated using a share of mind. Moreover, creation of a subject correlation diagram is performed to every period divided every month and things that divided one month into three.

(3) Hearing investigation

The feature and the contents of consideration of each item were explained showing the created subject correlation diagram to the instructor who was on the register last year.

4. A result and consideration

(1) An individual appearance ratio

How use which is utilized in instruction to an individual is carried out seems not to carry out it, since the variation in the number of appearances was seen by the child.

Probably, about an individual's evaluation, it should think over again.

(2) Description tendency

The feature remarkable in "an appropriate expression" and "expression to praise" was seen. In "an appropriate expression", there is a tendency for an instructor to glance and for many intelligible phenomena to be described. Moreover, changes of the number of appearances show that time with many appearances and little time are coming by turns. A describing daily report instructor is conjectured whether to have maintained balance in the described situation of a daily report.

In "expression to praise", it turns out that there are very many words of "enjoying oneself." Although the impression which is not praised as seeing this much in the child is received, when the actual situation is seen, it turns out that the child is evaluated by the fine viewpoint. The cause is giving priority to the quarrel etc. over the phenomenon praised as there being no margin to the extent that the phenomenon to praise is written finely.

During the period with much expression to praise, an athletic meet, a concert, etc. are the time whose child was not composed. When a child did not settle down but every problem was conspicuous, it was likely to become the description tendency for the atmosphere of the whole clubs for after school activities for children to be visible to a bad impression, and balance tended to improve by describing a good thing. The fact of submitting a daily report to a city office is cited as the reason.

Moreover, after being based on the event in the

elementary school, etc., it also turned out that the instructor has described the daily report.

5. Conclusion

(1) A gap of the daily report in a city office and the spot to search for

The information which a city office searches for is information on the range which can respond to the question which comes from guardians, such as atmosphere, a needle of your guidance, etc. as the whole juvenile club, or an opinion. That is, when describing, the priority which describes information required in order to stand improvement in an instructor's capability and the prospect of children's childcare will fall.

That is, the gap has arisen to the daily report which a city office searches for, and the information which the instructor who is actually working searches for.

(2) The proposal of a daily report

Then, with the daily report which administration defines, I thought independently that the proposal of the tool for information sharing between instructors would be made. It is two points, "evaluation to every juvenile person", and "guided correspondence of a method and a child." These propose carrying out by the method of being easy to practice at each juvenile club in addition in order to hold the prospect of future childcare and to establish the instructor's work.

The item of the daily report is described when you notice having noticed all the children's name along with time-axes, such as a "snack" and "playing outside", at the vertical axis on the horizontal axis. (Fig. 1). Moreover, the child who can write by all instructors of the day is described. This figure is an example of the item of the daily report created based on the daily report of the "Kantarou gakudou hoiku" of Mie Prefecture.

	Homework	situation and evaluation	Time of a snack	situation and evaluation	...
Child 1	Description column	Descriptio n column			
Child 2	Description column				
Child 3					
.					

Fig. 1 Item of a daily report Proposal

目 次

第一章	序章	1
1-1	放課後児童クラブへの着目	1
1-1-1	放課後児童クラブの定義	1
1-1-2	放課後児童クラブへの歴史	1
1-1-3	放課後児童クラブの課題	3
1-1-4	放課後児童クラブ指導員の役割	4
1-1-5	放課後児童クラブを対象とした既往研究	5
1-2	「日報」への着目	6
1-2-1	放課後児童クラブにおける「日報」	6
1-2-2	教育現場における日報	7
1-2-3	日報 日誌に関する既往研究	7
1-3	本研究の目的 意義	8
1-4	研究の構成	9
	参考文献	9
第二章	研究の方法	11
2-1	概要	11
2-2	研究対象の選定	11
2-3	日報分析	12
2-3-1	日報分析手順	12
2-3-2	話題分類	13
2-3-3	話題相関図	14
2-4	ヒアリング	18
2-5	考察	19
	参考文献	19
第三章	分析結果	21
3-1	概要	21
3-2	対象概要	21
3-3	日報における個人の出現率	23
3-4	話題ごとの単純集計	26
3-4-1	「指導 注意」の 카테고리内の単純集計 出現数の変遷	27
3-4-2	「約束事」の 카테고리内の単純集計 出現数の変遷	28
3-4-3	「遊び」の 카테고리内の単純集計 出現数の変遷	29
3-4-4	「しかる表現」の 카테고리内の単純集計 出現数の変遷	31
3-4-5	「褒める表現」の 카테고리内の単純集計 出現数の変遷	33
3-4-6	「対人トラブル」の 카테고리内の単純集計 出現数の変遷	35

3-4-7 「食」のカテゴリー内の単純集計 出現数の変遷	36
3-5 話題ごとの集計から分かる記述傾向	37
3-5-1 「褒める表現」と「しかる表現」の関係性	37
3-5-2 「褒める表現」の偏りと指導員の評価方法	38
3-6 各月ごとの記述傾向(話題相関図 個人の出現数)	39
3-6-1 5月	39
3-6-2 6月	42
3-6-3 7月	45
3-6-4 8月	47
3-6-5 9月	50
3-6-6 10月	54
3-7 ヒアリング	57
3-8 考察	57
3-8-1 個人の出現率	57
3-8-2 話題ごとの単純集計	58
3-8-3 話題相関図	58
第四章 結論	61
4-1 各章のまとめ	61
4-2 日報の現状 記述されている内容の特徴	62
4-2-1 個人に対する指導について	62
4-2-2 項目や表現の記述傾向について	62
4-2-3 市役所の求める日報と現場で活用できる日報のずれ	63
4-3 指導員にとってより良い日報の要素の提案	63
4-4 本研究の限界と課題	66
参考文献	66
注釈	66
謝辞	68
Appendix	1
全国学童保育連絡協議会ホームページ	3
厚生労働省発表 放課後児童クラブガイドラインについての報告書	4
実際に彦根市で使用している日報	5

図 表 目 次

図 1-1	放課後児童クラブ おやつの時間	5
図 2-1	彦根市に在る放課後児童クラブ 分布図	12
図 2-2	話題相関図 例	18
図 3-1	実際に使われている日報のフォーマット	23
図 3-2	個人の出現回数	24
図 3-3	個人の出現数 男女別	25
図 3-4	個人の出現数 学年別	25
図 3-5	2010年5月～10月 各カテゴリーの出現回数総数	26
図 3-6	カテゴリー別話題出現数(回)	27
図 3-7	指導注意 出現数の変遷	28
図 3-8	出現回数(約束事)	29
図 3-9	約束事 出現数の変遷	29
図 3-10	出現回数(遊び)	30
図 3-11	遊び 出現回数の変遷	31
図 3-12	出現回数(しかる表現)	32
図 3-13	しかる表現 出現数の変遷	32
図 3-14	出現回数(褒める表現)	34
図 3-15	褒める表現 出現数の変遷	34
図 3-16	出現回数(対人トラブル)	35
図 3-17	対人トラブル 出現数の変遷	36
図 3-18	出現回数(食)	36
図 3-19	食 出現数の変遷	37
図 3-20	「褒める表現」「しかる表現」比較	38
図 3-21	5月 日報動向	39
図 3-22	5月①(5/6～5/12 6日間)の話題相関図	40
図 3-23	5月②(5/14～5/21 6日間)の話題相関図	40
図 3-24	5月③(5/24～5/31 6日間)の話題相関図	41
図 3-25	6月 話題相関図	42
図 3-26	6月①(6/1～6/9 7日間)の話題相関図	43
図 3-27	6月②(6/10～6/18 7日間)の話題相関図	43
図 3-28	6月③(6/22～6/30 7日間)の話題相関図	44
図 3-29	7月 話題相関図	45
図 3-30	7月①(7/1～7/9 7日間)の話題相関図	46
図 3-31	7月②(7/12～7/21 7日間)	46
図 3-32	7月③(7/22～7/30 7日間)	47

図 3-33	8月 話題相関図	48
図 3-34	8月①(8/2～8/10 7日間)	49
図 3-35	8月②(8/11～8/23 7日間)	49
図 3-36	8月③(8/24～8/31 6日間)	50
図 3-35	9月 話題相関図	51
図 3-38	9月①(9/1～9/8 6日間)	52
図 3-39	9月②(9/9～9/16 6日間)	52
図 3-40	9月③(9/17～9/30 7日間)	53
図 3-41	10月 話題相関図	54
図 3-42	10月①(10/1～10/8 6日間)	55
図 3-43	10月②(10/12～10/20 7日間)	55
図 3-44	10月③(10/21～10/29 7日間)	56
図 4-1	提案する日報のフォーマット	65
図 4-2	従来の日報のフォーマット	65
表 1-1	放課後児童クラブ中心に見た児童福祉法法令化施行までの変遷	1
表 2-1	彦根市に在る放課後児童クラブ	11
表 2-2	日報内の記述を9つのカテゴリーに分類したもの 定義一覧	14
表 2-3	分割した期間について	15
表 2-4	クロス集計表 例	16
表 2-5	想起率によって求めたつながり 例	17
表 2-6	2010-2011年度在籍した指導員内訳	18
表 3-1	T放課後児童クラブの概要(2010)	21
表 3-2	平日のタイムスケジュール	21
表 3-3	夏休み期間タイムスケジュール	22
表 3-4	年間スケジュール	22
表 3-5	個人を表記した文章の数と出現した男女の出現回数	26
表 3-6	5月 個人を表記された文章	39
表 3-7	6月 個人を表記された文章の数	42
表 3-8	7月 個人を表記された文章	45
表 3-2	8月 個人を表記された文章の数	47
表 3-3	9月個人を表記された文章	50
表 3-4	10月 個人を表記された文章	54

第一章 序章

1-1 放課後児童クラブへの着目

1-1-1 放課後児童クラブの定義

全国学童保育連絡協議会による放課後児童クラブ(学童保育)の定義は、「共働き家庭や母子・父子家庭の小学生の子どもたちの毎日の放課後(学業休日は一日)の生活を守る施設が学童保育です。学童保育に子どもたちが入所して安心して生活を送ることによって、親も仕事を続けられます。学童保育には親の働く権利と家族の生活を守るという役割があります。学童保育に通う子どもたちは、そこを生活を営む場所として学校から『ただいま』と帰ってきます。学童保育では、家庭で過ごすのと同じように、休憩したり、おやつを食べたり友達とも遊びます。宿題もしたり、お掃除をしたり、学童保育から友達の家や公園に遊びに行きます。学童保育に一度帰ってきて塾に行く子もいます。学童保育とは子どもたちにとって『放課後の生活の場』そのものなのです。」¹⁾とされている。

すなわち、放課後児童クラブとは、放課後に親の代わりとなって保育・教育を行う事業・施設のことである。

また、放課後児童クラブのことを「学童保育」や「児童クラブ」等様々な呼び名はあるが、本論文では全国学童保育連絡協議会が定めている「放課後児童クラブ」に統一するものとする。

1-1-2 放課後児童クラブの歴史

放課後児童クラブは、1962年(昭和37年)に東京の学童保育連絡協議会が発足してから、1998年(平成10年)4月の法令化施行(児童福祉法)まで、長い年月をかけて学童保育連絡協議会によって体制を整えられてきた(表1-1)。児童福祉法では、小学校に就学しているおおむね10歳未満の児童で、その保護者が昼間家庭にいないものに対して授業終了後の遊びおよび生活の場を与え、健全な育成を図る事業を法的に確立させ、児童の心身の育成の責任を国や地方公共団体にも在ることを明確にした。児童福祉法の法令化施行により、上記のような定義で扱われるようになり、国や地方公共団体で児童福祉を担う体制が整ったように見られるが、実際は未だその体制は十分には整っていない。放課後児童クラブの数に対して対象となる児童の数が多すぎて、放課後児童クラブを必要とする児童全員が放課後児童クラブを利用できない待機児童の問題や、指導員の資格の有無を問わないので指導方法の未確立や指導員の能力差の問題や、給与が安価であるという指導員の待遇の問題など、様々な問題に関しては未だ解決まで至らない。

表 1-1 放課後児童クラブ中心に見た児童福祉法法令化施行までの変遷¹⁾

1962	東京の学童保育連絡協議会発足
1964	東京の学童保育関係者が第1回の学童保育研究集会を開催

1966	文部省が留守家庭児童会補助事業を開始（300ヵ所、予算 5000 万）
1967	第 2 回学童保育研究集会に参加した各地の関係者で全国学童保育連絡協議会（以下、全国連絡協議会）発足（以後、毎年、全国連絡協議会が全国研究集会を開催）
1971	文部省は留守家庭児童会補助を 1971 年度で打ち切り「校庭開放事業」に統合
1972	東京都が 3 ヶ年計画で学童保育指導員の正規職員化を決定
1973	全国連絡協議会が国に制度化を求める第 1 回国会請願（署名数 8 万余名）
1974	総理府『婦人問題総合調査報告書』が学童保育の制度化を提言／全国連絡協議会編集『日本の学童保育』創刊（隔月刊）／国会で厚生大臣が 1975 年度予算で制度化の努力を約束／国会内で映画『放課後の子どもたち』が上映される
1975	厚生省が 1976 年度概算要求で計上した都市児童健全育成事業「児童育成クラブ」4 億 700 万円が大蔵査定でカットされたが、復活折衝で 1 億 1700 万円が復活／全国連絡協議会が国に制度化を求める第 2 回国会請願（署名数 22 万余名）
1976	都市児童健全育成事業「児童育成クラブ」の創設（事実上の学童保育への国庫補助開始）／全国連絡協議会が第 1 回全国指導員学校を開催（以後、毎年、開催）
1977	『日本の学童ほいく』月刊化／全国連絡協議会が国に制度化を求める第 3 回国会請願（署名数 28 万余名）
1978	第 84 国会で学童保育制度化請願採択（衆議院・参議院）
1979	全国連絡協議会が国に制度化を求める第 4 回国会請願（署名数 37 万余名） 第 91 国会参議院で学童保育制度化請願採択（衆議院は解散）
1982	全国連絡協議会が学童保育実態調査
1985	全国連絡協議会が国に制度化を求める第 5 回国会請願（署名数 100 万余名） 第 104 国会で学童保育の制度化請願採択（衆議院・参議院）
1987	全国連絡協議会が学童保育の実態調査
1989	1.57 ショック（合計特殊出生率が 1.57）
1990	全国連絡協議会が厚生省に署名数 102 万余名を添えて「学童保育の制度化」要請／政府が「健やかに子供を生み育てる環境づくりに関する関係省庁連絡会」設置
1991	厚生省が「児童育成クラブ」事業を発展的に解消して放課後児童対策事業（児童クラブ事業）を創設
1993	総合研究開発機構(NIRA)「学童保育の制度化」提言／子供の未来 21 プラン研究会報告（学童保育の法制化の必要性を提言）／「子どもの権利条約」批准、発効／厚生省が学童保育の法制化を検討／全国連絡協議会が学童保育の実態調査

1994	中央児童福祉審議会の部会が学童保育の法制化を意見具申／全国連絡協議会が厚生省に対して法制化に関する要望書提出／政府が「今後の子育ての支援のための施策の基本方向」（エンゼルプラン）を策定したのを受けて厚生省・大蔵省・自治省が「緊急保育対策等5ヵ年事業」策定（放課後クラブを1999年に9000か所まで補助する計画）／全国連絡協議会が「ひとりひとりの声を国に届ける」運動を展開（厚生省に2700人の父母・指導員の声を届ける）
1995	厚生省「コミュニティー児童館」事業（学童保育専用の施設への補助）創設／厚生省が「地域児童育成計画指針」（地方版エンゼルプラン指針）策定
1996	中央児童福祉審議会基本問題部会が学童保育の法制化の必要性を盛り込んだ中間報告をまとめる／全国連絡協議会が『学童保育の制度確立を—私たちの提言をまとめ厚生省などへ要望。また内閣総理大臣と厚生大臣に「学童保育のよりよい制度化を」を要望、署名を提出（署名数65万余名）
1997	第140国会で児童福祉法等の一部改正により学童保育が「放課後児童健全育成事業」として法制化される
1998	4月から学童保育の法制化施行

1-1-3 放課後児童クラブの課題

現在の放課後児童クラブの活動方針は各市町村・各クラブによって大きく異なっており「子どもを預かるだけ」となっている放課後児童クラブも少なくない。その要因は、放課後児童クラブの指導員へのヒアリングや、実際に観察をした結果、以下の3点が考えられる²⁾。

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ①指導員の意識や能力の問題 ②情報共有の問題 ③行政の問題 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------|

①指導員の意識や能力の問題

放課後児童クラブ指導員には、特定の資格は必要なく、研修内容も確定していない。それより、主婦や学生もパートやアルバイトで指導員を出来るので、指導員の専門性という点で問題視されている。

②情報共有の問題

放課後児童クラブ内における指導員間の情報共有の方法として、「口伝え」と「日報」が用いられている。

1つの放課後児童クラブには正職員が1～2人程度在籍しており、後はアルバイトやパートで構成されている。そこで、「日報」を用いた情報共有の利点として、日報の記述からア

アルバイトやパートの考えを読み取り、助言や注意することで、アルバイトやパートの成長につなげやすいということが挙げられる。しかし、「日報」を指導員の能力の向上や、保育の見通しの情報共有が出来切れていないという問題がある。また、最近では、指導員間のコミュニケーション不足も問題となってきた。

③行政の問題

放課後児童クラブを運営している市役所は、放課後児童クラブとの連携が必須となってくるが、放課後児童クラブへの協力体制や現場への理解の欠如が問題になることもある。

1-1-4 放課後児童クラブ指導員の役割

厚生労働省によると放課後児童クラブ指導員の役割は以下のように定められている³⁾。

(1)放課後児童指導員は、以下について、留意のうえ、(2)に掲げる活動を行うこと。

- ①子どもの人権の尊重と子どもの個人差への配慮。
- ②体罰等、子どもに身体的・精神的苦痛を与える行為の禁止。
- ③保護者との対応・信頼関係の構築。
- ④個人情報の慎重な取扱いとプライバシーの保護。
- ⑤放課後児童指導員としての資質の向上。
- ⑥事業の公共性の維持。

(2) 放課後児童クラブ指導員は、次に掲げる活動を行うこと。

- ①子どもの健康管理、出席確認をはじめとした安全の確保、情緒の安定を図ること。
- ②遊びを通しての自主性、社会性、創造性を培うこと。
- ③子どもが宿題・自習等の学習活動を自主的に行える環境を整え、必要な援助を行うこと。
- ④基本的な生活習慣についての援助、自立に向けた手助けを行うとともに、その力を身につけさせること。
- ⑤活動状況について家庭との日常的な連絡、情報交換を行うとともに、家庭や地域での遊びの環境づくりへの支援を行うこと。
- ⑥児童虐待の早期発見に努め、児童虐待等により福祉的介入が必要とされるケースについては、市町村等が設置する要保護児童対策地域協議会等を活用しながら、児童相談所や保健所等の関係機関と連携して対応を図ること。
- ⑦その他放課後における子どもの健全育成上必要な活動を行うこと。

以上のように、放課後児童クラブ指導員は児童に対して一定の責任を持ち、児童の自主性や社会性、創造性を培い、自立の手助けを行いながら生活を共にすることが役割とされ

ており、児童の成長のための専門的な能力や知識が必要であることが分かる。



図 1-1 放課後児童クラブ おやつ時間

1-1-5 放課後児童クラブを対象とした先行研究

「放課後児童クラブ」を対象とした研究は多々あり、放課後児童クラブの役割についてのもの、あるいは、指導員の専門的な知識の必要性についてのものが多く見られる。例えば、以下のようなものがある。

① 学童保育と「子どもの遊び」に関する一考察⁴⁾

放課後児童クラブが、児童にとって遊びを成立させるために必要な「遊びの三間」、つまり、「時間」「空間」「仲間」が確保されている貴重な場所であると主張するとともに、遊びと勉強時間の関係性や、異学年との遊びは社会的効果や精神的効果のあることも明らかにしている。

② 学童保育における指導員の専門性 K市学童保育の実践から⁵⁾

行政や保護者から見た指導員の役割の認知度について実態を K市の指導員部会や保護者に対するアンケート調査によって明らかにし、放課後児童クラブの最大の課題の一つとしている「指導員の役割と仕事の理解を広げること」に着目し、放課後児童クラブの指導員の役割の理解のある社会になることの必要性について述べている。

③ 学童保育における子育て・家族支援の課題⁶⁾

放課後児童クラブにおける子育て・家族支援について、関連先行研究を整理し、運営・経営に関する課題、気になる子どもと保護者への支援に関する課題、保護者のつながりやネットワークの形成に関する課題などを確認した。そして、放課後児童クラブを基盤とした子育て・家族支援の活動のためには地域の理解と関わりが重要だということを主張している。著者は今後、放課後児童クラブにおける職責や専門性を明らかにしていく必要であるということ述べている。

④放課後児童クラブガイドラインについての報告書⁷⁾

放課後児童クラブの対象児童や規模、開所時間、などの定義を定めたもので、放課後児童クラブにおける指導員の役割についても記述されている。本論文でも放課後児童指導員の役割などで引用している。

このように、放課後児童クラブに関する研究には、放課後児童クラブそのものを論じるもの、保護者との関わり方、児童にとっての放課後児童クラブの位置づけなどの実態調査が多い。そこで本研究では、指導員の活動方針の定義付けの基盤となり得る「日報」に注目した。

1-2 「日報」への着目

1-2-1 放課後児童クラブにおける「日報」

放課後児童クラブにおける「日報」とは、指導員が一日一日の児童の様子や何をしたか、特筆すべき出来事等を記録したものであり、放課後児童クラブの行政に対する報告や指導員間の情報共有が主な目的である。日報のやり取りの頻度は各市町村によって異なるが、放課後児童クラブが定期的に日報を提出し、行政がチェックして返却している。内容としては、主に児童が安全に生活できているか・保護者からの意見の有無等、行政が必要とする内容を日報に記述することが目的とされている。しかし、日報には指定のフォーマットは存在せず、各市町村に任されている。

上記の様に、日報を用いる目的の一つとして行政との情報共有があるが、その他に、全国学童保育連絡協議会が述べている日報の目的として、以下の三点が述べられている²⁾。

1. 学童保育の生活の中で子どもの姿をとらえ判断し、働きかけをしていく指導員としての力量を育むため
2. 現状や問題を整理分析することによって今後の保育の見通しをつかんでいくため
3. 指導員の仕事を確立していくため

上記のように定義されているが、実際は、日報のやり取りの方法や期間が明確化されて

おらず、また、現場では日報を用いて情報共有していることが主となっていないことから、指導員や行政からは軽視されている現状である。

1-2-2 教育現場における日報

日報の目的は、児童の状況や指導状況、課題点を整理して今後の指導に役立てることである。これは、放課後児童クラブに限らず、小学校や大学での他の教育現場でも同様に使われている⁸⁾。そこで、放課後児童クラブを対象として分析し、児童の状況や指導状況、課題点を整理して今後の指導に役立てる日報の提案は、他の教育の現場でも活用できると考える。

また、前例が余りない新規の試みに対して、一回一回細かく評価をして次回に活かすという点でも「日報」は重要となってくる。教育分野で考えると、最近導入され始めた、環境教育などに関しても、教育過程や普段の生活の様子を記す「日報」は重要であると考えられる。

1-2-3 日報・日誌に関する先行研究

日報や日誌に関する先行研究には以下のようなものがある。

①保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連 - 学生自身による日誌の内容分析学習を通して -⁸⁾

実習日誌の記述内容の傾向を客観的にとらえ、その傾向と、施設評価ならびに養成校の総合評価との関連を検討することを目的に以下の方法で分析を行った。

方法は、実習日誌の各文章を「子ども」「保育士」「実習生」「保育」「その他」でカテゴリーに分ける。また、各文章を「主観的な記述」「客観的な記述」に分け、その中で「子どもの発達」や「保育士の保育技術」、「反省・理由」、「主張・思い」等のカテゴリーに分類していく。

この分析から、出現頻度の偏りが見られた。子どもについての記述は多く、より深く、考えを発展させている考え方の記述は比較的少ない。また、評価と記述傾向の関連は見られた。本研究対象でも同様の傾向が見られると考える。

②相談機関実習の学びの構造 - 「支援の構造的理解」プロセスに着目した実習日誌の質的分析 -⁹⁾

相談機関の実習日誌に密着して独自の理論を生成し、概念と諸概念を比較によって関連付け、概念のまとまりから算出したカテゴリーを基にカテゴリー間の関係から1つのコア・カテゴリーを選定して、それを中心に一連の現象を説明する質的研究法(グラウンテッド・セオリー・アプローチ)を用いて、相談機関の実習における学生の体験と学びの連関を明らかにすることを試みたものである。結果として、学生自身の<専門的役割の明確化>と<価値

観の転換>の相互作用が学習プロセスを支えるために重要であることが分かった。そして著者は、学習プロセスの標準化を主張している。

以上のように、学生の実習日誌に関して分析し、今後の実習教育の参考とするものはあるが、放課後児童クラブの日報を対象とした研究や指導員という立場の人間が記述した文章を分析したものは未だ見られない。また、日誌を一定の期間ごとに分析を行った研究も見られない。

1-3 本研究の目的・意義

本研究の目的は以下の2点である。

- | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">①放課後児童クラブにおける日報の持つ情報量や性質について把握する。②現場での放課後児童クラブの日報の活用方法を見出す。 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

本研究の意義は、以上の目的を達成することで、放課後児童クラブにおいて、日報の情報の特徴を明確化し、今後の調査対象として有効であることを示すこととなり、また教育現場において、より現状を把握しやすく、かつ指導員同士の共有をしやすい日報となることである。

歴史の浅い前例の少ない授業では、一回一回細かい評価が必要で、特に座学より体験学習の様なプログラムが多い環境教育の場合、評価をし、前例を作ることが重要であると考えられる。また、授業後の児童の理解度合いを測るには普段の生活を観察し、評価できる「日報」の意義は大きいものとする。

1-4 研究の構成

本研究を明らかにするためのプロセスとして、下記のように論文の構成をした。本論文は結論を含めて4章から構成されており、各章における研究の目的及び、方法は以下に記載する通りである。

第一章

本研究で取り扱う放課後児童クラブと日報の背景、目的、意義について述べる。

第二章

本研究の研究対象、分析方法を述べる。

第三章

対象の放課後児童クラブの日報を期間ごと・言葉の分類ごとで分けて、集計・図化をし、考察を述べる。

第四章

本研究の結論、現状の日報で把握できる情報や特徴を整理し、把握しきれない情報をどのように補っていくことが良いか提案し、今後の課題を述べた。

参考文献

- 1)全国学童保育連絡協議会<<http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/>>， 2011-9-10
- 2)川崎敦子， 2011-09-06， 私信
- 3)厚生労働省発表 放課後児童クラブガイドラインについての報告書<<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/10/dl/h1019-3a.pdf>>， 2011-9-10
- 4)高橋ひとみ：学童保育と「子どもの遊び」に関する一考察，桃山学院大学人間科学， 31， pp.21-40 (2006)
- 5)森洋子：学童保育における指導員の専門性 K市学童保育の実践から，岐阜女子大学紀要， 37， pp.71-79 (2008)
- 6)伊部恭子：学童保育における子育て・家族支援の課題，社会学部論集， 6， pp.1-18 (2010)
- 7)全国学童保育連絡協議会：第36回全国学童保育指導員学校西日本滋賀会場受講のしおり， 2011-6-25
- 8)権藤眞織：保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連 - 学生自身による日誌の内容分析学習を通して，近畿大学豊岡短期大学論集， 4， pp.39-47 (2007)
- 9)坪内千明：相談機関実習の学びの構造 - 「支援の構造的理解」プロセスに着目した実習日誌の質的分析 - ，人文・社会科学論集， 27， pp.17-34 (2010)

第二章 研究の方法

2-1 概要

この章では、日報内の情報の把握をするための研究方法について述べる。以下、対象地の選定と具体的な研究方法について示す。研究方法に関しては、時間の流れに伴い記述される情報が変化する様子を視覚的に把握し、前章で挙げた日報分析の目的を充足する情報、つまり指導員にとってより働きやすい「日報」に改善するために必要な情報を収集し検討を加えていくためのものを選択する。本研究では、期間を区切って、題分類と話題相関図の作成する方法を用いる。

2-2 研究対象の選定

今回対象とする、滋賀県彦根市 T 児童クラブの日報は、彦根市に在る 17 ヶ所の放課後児童クラブの日報と同じ形式である。それゆえ、T 放課後児童クラブの日報を分析することで、他の放課後児童クラブでも応用できるものと考ええる。

対象とする放課後児童クラブの選定理由として、著者が放課後児童クラブに行き、実際に児童や指導員の様子を観察したり、ヒアリングを頻繁に行える点。そして、対象とする放課後児童クラブでは他の放課後児童クラブより児童の教育に力を入れているため、従来の放課後児童クラブの問題である「指導員の指導に向かう姿勢(指導員の意識)」の問題が、日報の記述内容に影響が少ないのではないかと考えられるため、対象地を彦根に選定した。

対象地の名称と所在地、分布図を表 2-1・図 2-1 に示す。図 2-1 にある○と番号は表 2-1 の番号の放課後児童クラブの位置を示す。

表 2-1 彦根市に在る放課後児童クラブ

	名称	所在地	規模(目安人数)
1	城北小学校放課後児童クラブ	彦根市松原町 3751-3	20 人
2	鳥居本小学校放課後児童クラブ	彦根市鳥居本町 1550-1	40 人
3	城西小学校放課後児童クラブ	彦根市本町三丁目 3-22	40 人
4	城東小学校放課後児童クラブ	彦根市京町二丁目 2-19	40 人
5	金城小学校放課後児童クラブ	彦根市大藪町 391	80 人
6	佐和山小学校放課後児童クラブ	彦根市安清町 11-32	70 人
7	平田小学校放課後児童クラブ	彦根市平田町 267	40 人
8	旭森小学校放課後児童クラブ	彦根市東沼波町 455	90 人
9	城南小学校放課後児童クラブ	彦根市西今町 383	130 人
10	城陽小学校放課後児童クラブ	彦根市甘呂町 430	30 人
11	高宮小学校放課後児童クラブ	彦根市高宮町 2447	70 人
12	若葉小学校放課後児童クラブ	彦根市蓮台寺町 180	50 人

13	河瀬小学校放課後児童クラブ	彦根市極楽寺町 118	60 人
14	亀山小学校放課後児童クラブ	彦根市賀田山町 8	30 人
15	稲枝北小学校放課後児童クラブ	彦根市下岡部町 597	40 人
16	稲枝東小学校放課後児童クラブ	彦根市稲部町 308	60 人
17	稲枝西小学校放課後児童クラブ	彦根市本庄町 3583	40 人



図 2-1 彦根市に在る放課後児童クラブ 分布図¹⁾

2-3 日報分析

2-3-1 日報分析手順

分析の対象は、2010年5月～2010年10月の半年間とする。入学してから1ヵ月経過して、1年生が放課後児童クラブに慣れ出す5月から、夏休み期間でのグループワークを経て、1つの児童クラブとしてまとまりが見えてくる10月までの期間で日報分析を行う。

日報に記載されている言葉から、指導員から見た視点である放課後児童クラブ、つまり日報内の情報や、時間の流れに伴う情報の変化を視覚的に把握するために、以下の手順で分析を行う。

①日報に記載されている言葉ごとに、例えば「遊び」や「指導・注意」等のカテゴリーに、

話題を分類する。(図 2-2 参照)

②月ごと、また、1 ヶ月を3分割したもの(6~7日間)ごとで、①で分類したカテゴリー間の繋がり(話題想起率)を算出し、話題相関図を作成する。

③記載された文章のテーマ(個人についてか全体の雰囲気について記述されているか、男女の出現率)を分類する。

以上3つの分析の手順で、個人名の記述量を集計と話題ごとの集計、話題相関図の作成をすることで日報の特徴をつかみ、前章で挙げた日報の目的である3点、「学童保育の生活の中で子どもの姿をとらえ判断し、働きかけをしていく指導員としての力量を育むため」「現状や問題を整理分析することによって今後の保育の見通しをつかんでいくため」「指導員の仕事を確立していくため」を満足した日報、つまり、指導員にとってより働きやすい「日報」となるために必要な情報について検討を加えていく。

2-3-2 話題分類

指導員の考え方や児童の生活の時間の流れを見ていくために、分類するカテゴリーを以下の9つとし、言葉をカテゴリーごとに分類していく(表 2-2)。「指導・注意」・「対人トラブル」・「褒める表現」・「しかる表現」で、指導員の考える児童への評価や力を入れて指導したい内容などが分かる。また、「遊び」・「約束事」・「生物・植物」・「食」で、児童の生活している様子を見る。

分類方法の例として、日報上で『〇〇君と△△君がブランコの取り合いをしていたので、順番で使うように注意した。』と記述されているとすると、『ブランコ』、『取り合い』、『注意』の3つの言葉がそれぞれ、「遊び」、「対人トラブル」、「指導・注意」のカテゴリーに当てはめて集計していく。

また、日報を引用した文章に関しては『』を、カテゴリーの名前を「」で表わすものとする。

表 2-2 日報内の記述を9つのカテゴリーに分類したもの 定義一覧

カテゴリー	説明	具体例
指導・注意	指導員から受けた注意や指導	「指導した」・「注意」・「話し合わせる」
遊び	遊びの方法	「ブランコ」・「泥遊び」
約束事	児童クラブのルールを守らない行為	「机の上に乗る」
生物・植物	生物や植物の名前	「バッタ」・「カエル」
対人トラブル	対人での事象	「喧嘩」・「取り合い」
褒める表現	児童の性質でポジティブな表現	「落ち着いてきた」・「楽しそう」
しかる表現	児童の性質でネガティブな表現	「落ち着きのない」・「イライラ」
食	食に関連したもの	「おやつ」・「弁当」
その他	その他	

2-3-3 話題相関図²⁾

話題分類してカテゴリーごとで集計したものが話題出現数になるが、各話題が記事全体に対してどれくらいの割合で出現するかを表したものが話題想起率である。話題想起率は次式によって求める。

$$\text{ある話題の話題想起率 (\%)} = \frac{\text{ある話題が出現した回数(話題出現数)}}{\text{全記事数}} \times 100$$

話題を分類したデータをクロス集計する。クロス集計することで2つの話題間の同時に出現した回数に分かる。しかし、これではまだカテゴリー同士の話題出現数の差を考慮できないため、求めた想起率を使って、次式で話題同士のつながりの関係を用いる。

$$\begin{aligned} & \text{想起率による話題(ア)(イ)のつながりの強さ(\%)} \\ & = \frac{\text{話題(ア)と話題(イ)が同時に出現した記事数}}{\text{話題(ア)の話題出現数} + \text{話題(イ)の話題出現数}} \times 100 \end{aligned}$$

クロス集計、話題相関図は、月ごとに分けた期間と、ひと月を6～7日に3分割したもので作成する。月単位での変化と、月ごとで観察できない短期間の変化について1/3ヵ月ごとで見る。分析には一定の文章量を必要するために約1週間という基準で1ヵ月を分けることとした。3分割した期間については表2-3に示す。

表 2-3 分割した期間について

月	名前	期間	日数
5月	5月①	5/6～5/13	6
	5月②	5/14～5/21	6
	5月③	5/24～5/31	6
6月	6月①	6/1～6/9	7
	6月②	6/10～6/18	7
	6月③	6/22～6/30	7
7月	7月①	7/1～7/9	7
	7月②	7/12～7/21	7
	7月③	7/22～7/30	7
8月	8月①	8/2～8/10	7
	8月②	8/11～8/23	7
	8月③	8/24～8/31	6
9月	9月①	9/1～9/8	6
	9月②	9/9～9/16	6
	9月③	9/17～9/30	7
10月	10月①	10/1～10/8	6
	10月②	10/12～10/20	7
	10月③	10/21～10/29	7

表 2-4 は 2010 年度の 1 ヶ月間の日報をクロス集計したものである。1 日の日報上で 2 つの カテゴリーが同時に出現した数を集計した。数字が多いほど、同時に出現した数が多い。しかし、表 2-4 のクロス集計だけでは、複数の期間ごとの比較が出来ないため表 2-5 で想起率によって求めた話題間のつながりの強さを求める。これは、上の式を用いて出していく。表 2-5 の数字でも、数が多いほど 2 つのカテゴリー間のつながりの強さは強くなる可以说。

表 2-4 クロス集計表 例

	指導・ 注意	遊び	約束事	生物・ 植物	対人ト ラブル	褒める 表現	しかる 表現	食	その他
指導・ 注意		11	5	4	3	11	15	2	1
遊び	11		6	4	2	15	14	2	1
約束事	5	6		2	1	5	4	1	1
生物・ 植物	4	4	2		1	3	4	1	0
対人ト ラブル	3	2	1	1		4	5	1	0
褒める 表現	11	15	5	3	4		15	3	0
しかる 表現	15	14	4	4	5	15		2	0
食	2	2	1	1	1	3	2		0
その他	1	1	1	0	0	0	0	0	

表 2-5 想起率によって求めたつながり 例

	指導・ 注意	遊び	約束事	生物・ 植物	対人ト ラブル	褒める 表現	しかる 表現	食	その他
指導・ 注意		26	26	3	31	25	34	13	10
遊び	26		16	3	19	30	24	15	18
約束事	26	16		8	13	21	19	9	4
生物・ 植物	3	3	8		0	3	5	6	11
対人ト ラブル	31	19	13	0		22	21	9	12
褒める 表現	25	30	21	3	22		17	8	13
しかる 表現	34	24	19	5	21	17		12	9
食	13	15	9	6	9	8	12		11
その他	10	18	4	11	12	13	9	11	

求めた表を用いてカテゴリー間の相関関係を一見して比較考察できるように、ソシオグラムで図表化する(図 2-2)。本研究では、各話題を円で示し、丸の大きさで出現数を、線の太さで話題のつながりを示す。話題のつながりの強さについては、弱い相関については示さず、点線(24~28)、黒線(29~33)、赤線(34~)の順につながりが強いことを表す。

想起率の強さは、丸の大きさと色で変える。黒(6以下)、紫(7~14)、青(15~20)、黄(21~30)、赤(31~)で強くなっていき、強くなるにつれて丸も大きくなる。

図 2-2 は話題相関図の例である。

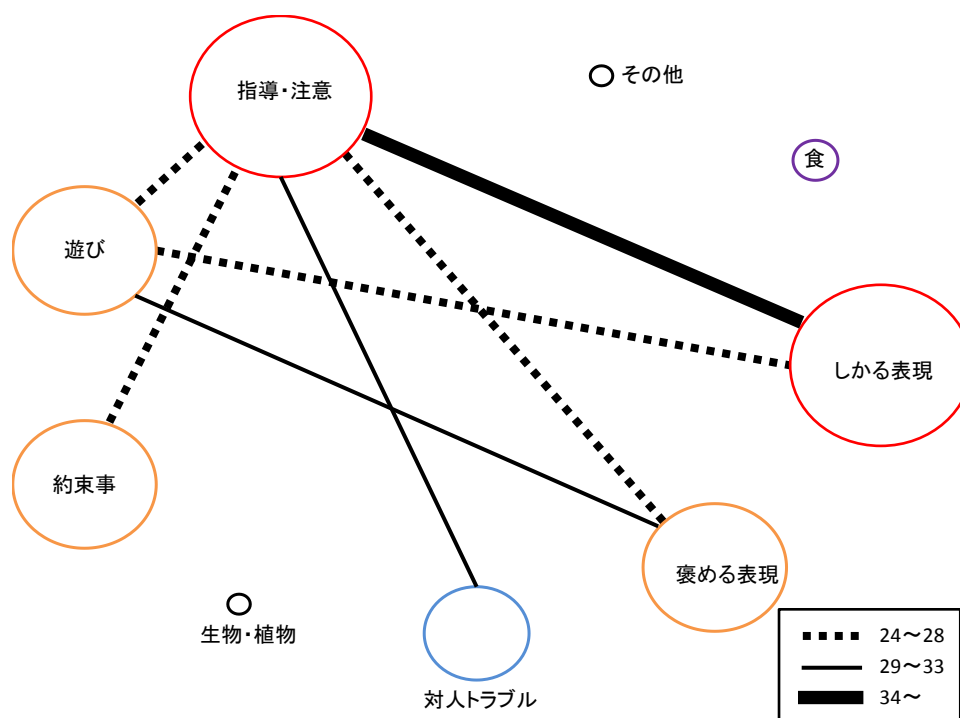


図 2-2 話題相関図 例

2-4 ヒアリング

作成した話題相関図を実際に滋賀県彦根市 T 放課後児童クラブの指導員に見せながら、各項目の特徴など、考察内容について説明した。その後、「基礎情報の補足はないか」や「書き方の特徴として指導員自身が見て気付いたこと」、「情報共有の方法」などについて、実際に著者が 2011 年度に指導員として対象となる児童クラブに在籍し、2011 年 11 月 29 日に指導員にヒアリングを行った。

2010 年度在籍していた対象児童クラブで、今年度も在籍している 8 人の指導員を対象として行った。

内訳は、20 代女性 2 人・40 代女性 6 人である。内 2 人が正職員で、1 人は保育士資格所有者である (表 2-6)。

表 2-6 2010-2011 年度在籍した指導員内訳

	男(総数)	女(総数)	正職員	保育士資格所有者
20 代	0 人	2 人	0 人	0 人
30 代	0 人	0 人	0 人	0 人
40 代	0 人	6 人	2 人	1 人

2-5 考察

各項目・各期間について集計し，期間ごとに相関関係について分析し，指導員に対するヒアリングで情報を補足した後に，以下の点について考察を行う．

- ・日報内の男女比
- ・カテゴリー内に出現する言葉の傾向
- ・時期ごとの記述内容の傾向
- ・以上を踏まえて，現在の日報の特徴
- ・より現状把握しやすく，かつ指導員同士の情報共有をしやすい日報になるための要素について検討する．

参考文献

- 1) googlemap<<http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&tab=wl>>， 2011-12-26
- 2)近藤隆二郎，玉井郁圭：着物着用者のブログにおける話題の相関と変遷に関する研究-衣服を基にした消費生活の見直しを目指して-，第 38 回環境システム研究論文発表会，pp.425-432 (2010)

第三章 分析結果

3-1 概要

この章では、対象とする放課後児童クラブの概要を述べた後、個人の出現率と各カテゴリーの単純集計、各期間での話題相関図、ヒアリングでの情報を記載した。そして最後に表現方法や記述傾向に関する考察を述べた。

3-2 対象概要

対象の放課後児童クラブの概要と平日のタイムスケジュール、夏休み期間のタイムスケジュール、年間スケジュールを以下に示す。

表 3-1 は対象の児童数と指導員数、クラス数、1日にいる指導員数の人数を示したものである。

表 3-1 T 放課後児童クラブの概要(2010)

総児童数	87 人
1 年生	33 人
2 年生	28 人
3 年生	26 人
指導員数	20 人
クラス	2 クラス
1 日の指導員	8 人

表 3-2 は、平日の放課後児童クラブのタイムスケジュールを示したものである。

表 3-2 平日のタイムスケジュール

14:45	帰宅
	宿題の時間
	全員終わり次第外遊びの時間
16:20	片づけ 中に入っておやつの準備
16:30	おやつの時間
16:40	絵本読み聞かせ
16:45	おやつ片づけ
	中で遊ぶ時間
17:15	1 つの教室だけで迎えを待つ
	親の迎えが来次第帰宅

表 3-3 は夏休み期間の放課後児童クラブのタイムスケジュールである。日によっては、プログラム変更もあり、遊びの時間に児童全員を連れて、児童クラブ外に行くこともある。

表 3-3 夏休み期間タイムスケジュール

9:00	児童集合
9:30	勉強の時間
10:00	おやつの時間
10:30	遊びの時間
11:45	片づけ
12:00	お昼ごはん
13:00	お昼休憩
14:00	遊びの時間
14:45	片づけ
15:00	おやつの時間
15:30	遊びの時間
18:00 頃	全員帰宅

表 3-4 は T 放課後児童クラブでの年間スケジュールを示したものである。

表 3-4 年間スケジュール

	放課後児童クラブ予定	小学校予定
5 月		PTA 総会
		G.W.
6 月		
7 月	河童を知るプログラム	夏休み
8 月	河童を知るプログラム	夏休み
	彦根りんご収穫祭	
	夏休みタイムテーブル	
9 月		運動会
		音楽会
		遠足
10 月		遠足

日報の項目は、「児童の様子」「指導状況」「特記事項」3点の項目が書かれてあるものを使用しており、日報を書くのは正職員の2人が交互に記述している。実際に使われている日報のフォーマットを図3-1に示す。(実際に使用している日報についてはAppendix参照)

月			日			曜日			指導員					
日時														
在籍人数	1年	人	2年	人	3年	人	その他	人	計	人	出席	人	欠席	人
指導状況														
児童の様子														
特記事項														

図 3-1 実際に使われている日報のフォーマット

3-3 日報における個人の出現率

以下、日報を引用した文章に関しては『』を、カテゴリーの名前を「」で表わすものとする。

対象とする放課後児童クラブの出現回数を集計したところ、日報上に1度も出現していない児童が約3割、1回出現した児童が約2割、と出現回数が0~1回の児童が半数以上いることが分かる。しかし、1割ほどの児童は10回以上出現しており、1番多い児童で17回出現していた。(図3-2)。

また、男女別の個人の出現数を図3-3に、学年別の出現数を図3-4に示した。10回以上出現する児童は、全員男子であり、かつ、3年生が多いことが分かる。それらの児童は、よく喧嘩や問題ごとを起こす児童であった。女子児童に関しては、出現数は多くても3回であり、女子児童はあまり日報上に出現していないことが分かる。

『〇〇が△△であった。』というような句点で区切られたものを1つの文章として、全文章に対する、個人が出現した文章(『〇〇君がこんなことをした。』といったもの)の割合を集計した。

個人を表記した文章の割合は全文章に対して3割程度しかなく、記述されているほとん

どが、児童クラブ全体としての雰囲気に関して記述していることが分かる。また、出現している児童のほとんどが男子であることも顕著であった(表 3-5)。以上より、各児童に対して、評価し、指導に活かしていくような使用のされ方はされていない可能性がある。

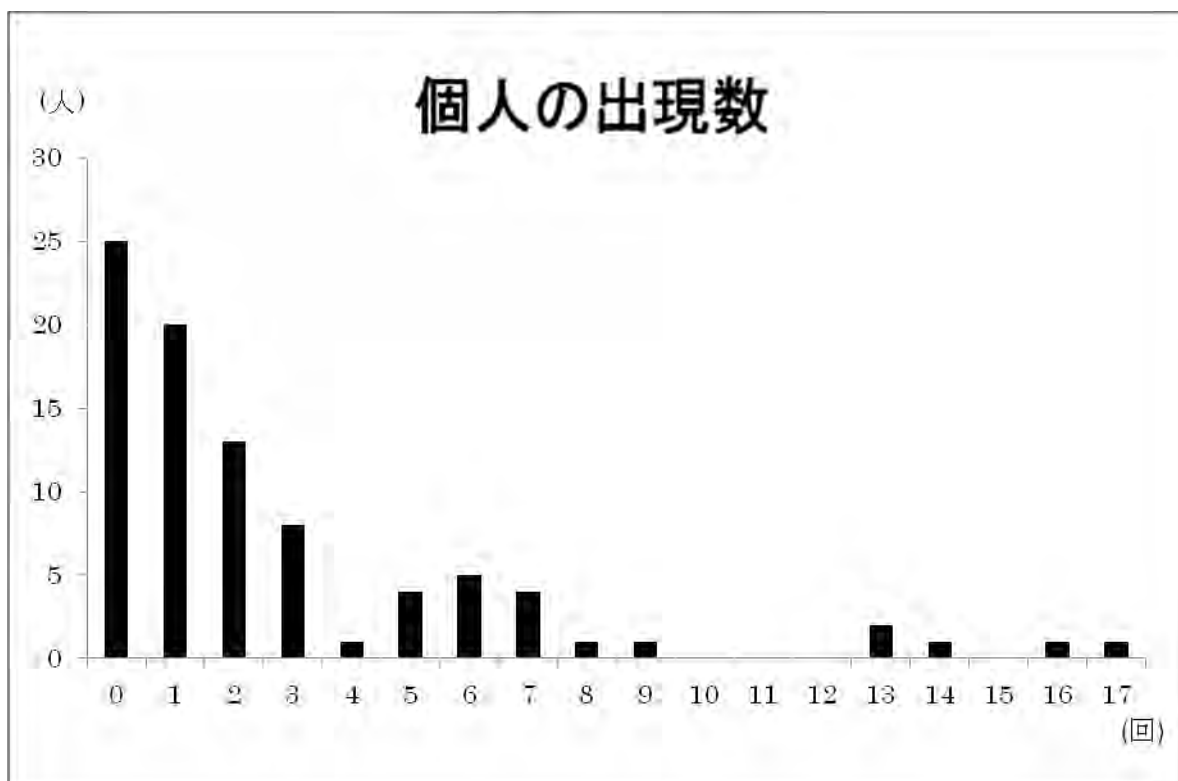


図 3-2 個人の出現回数

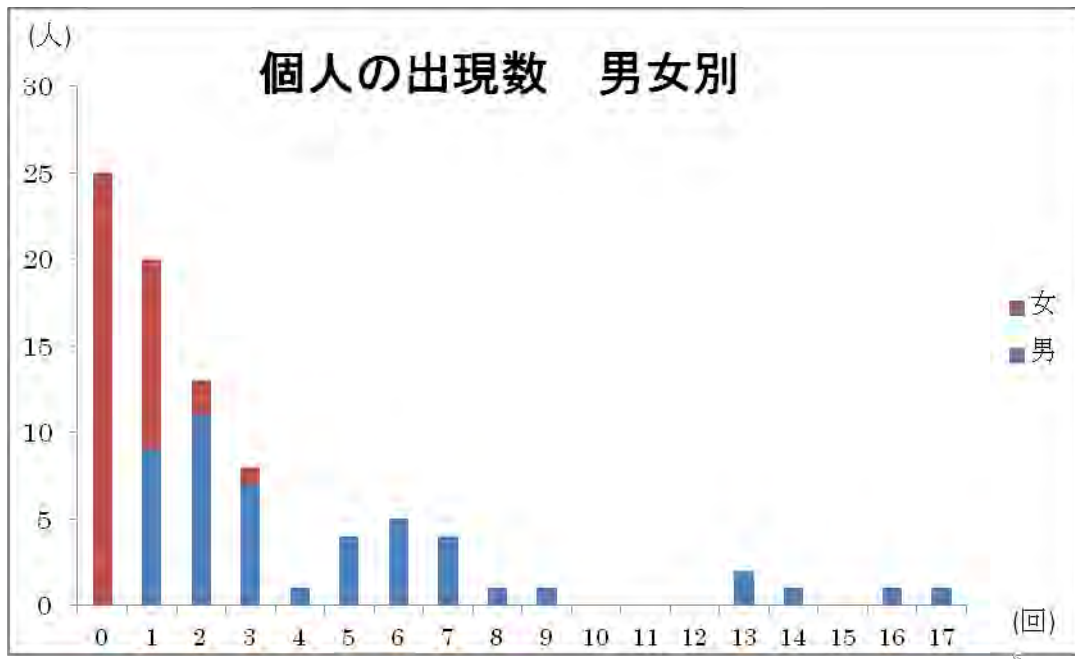


図 3-3 個人の出現数 男女別

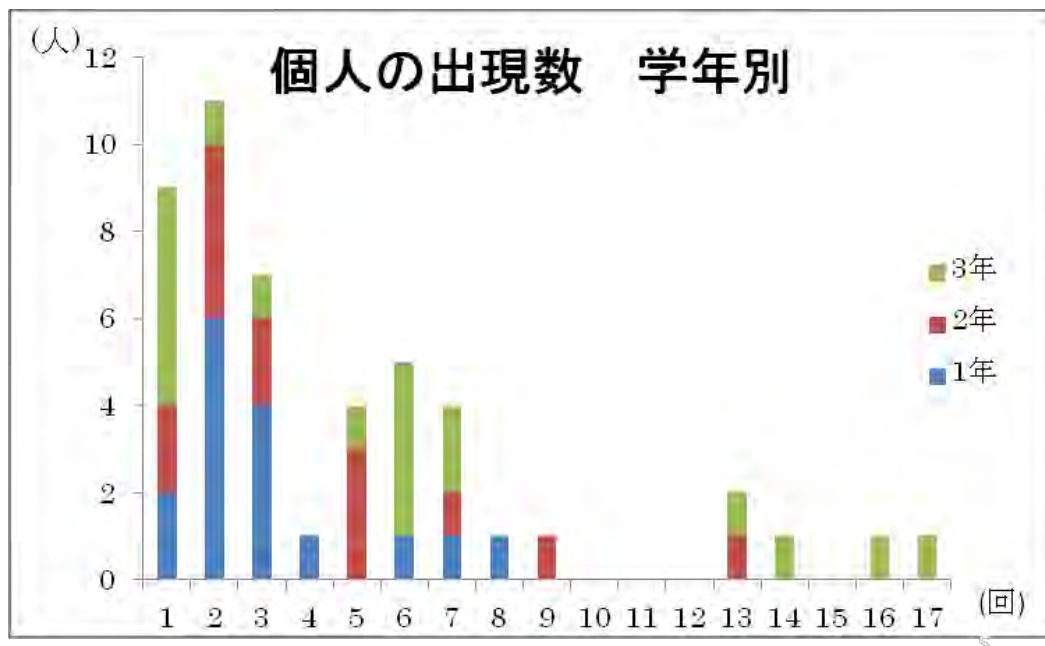


図 3-4 個人の出現数 学年別

表 3-5 個人を表記した文章の数と出現した男女の出現回数

	全文章	個人を表記した文章	男(回)	女(回)
5月	71	28	39	2
6月	90	24	50	3
7月	79	18	23	2
8月	71	14	29	3
9月	89	30	46	5
10月	93	22	37	3

3-4 話題ごとの単純集計

対象期間の言葉をカテゴリー分けし、その総出現数を図 3-5 に示す。「しかる表現」が最も多く、「指導・評価」、「遊び」、「褒める表現」の順で多い。また、「食」のカテゴリー、つまり、おやつに関する記述が少ないことも特徴的である。

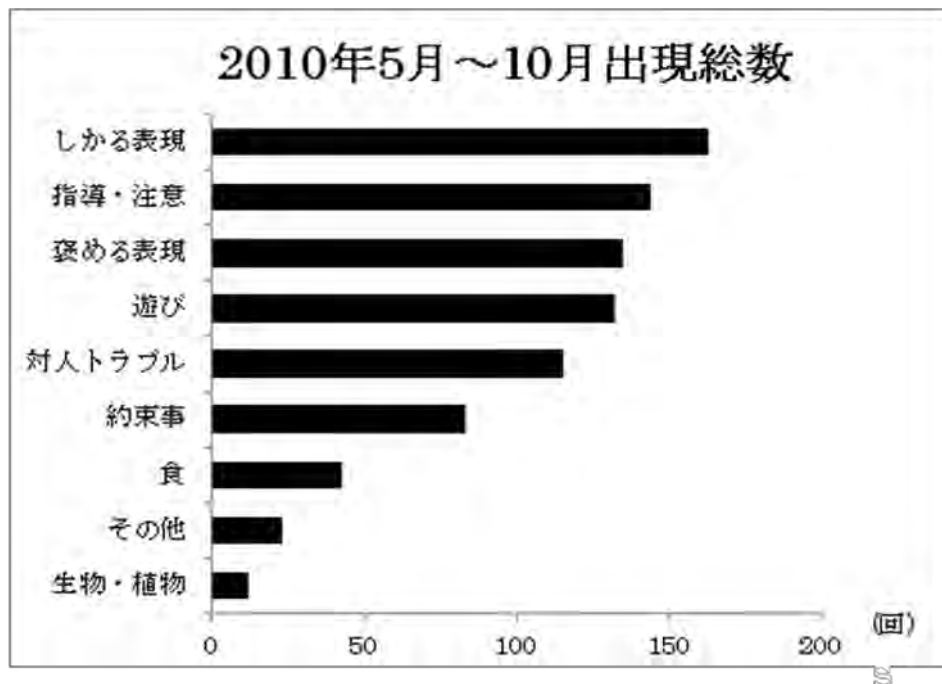


図 3-5 2010年5月～10月 各カテゴリーの出現回数総数

言葉をカテゴリー分けしたものと単純集計したものを図 3-6 に示す。全体の言葉数としては、8月に急に減っているが、これは夏休みの1日保育のために全体を通しての報告事項がいつもより多いため、日報に個人に対して行った評価や、放課後児童クラブの雰囲気について書くスペースが足りないことが原因である。8月を除くと全体的には話題数が減少する傾向にあるが、対人トラブルについて目立ってくる。

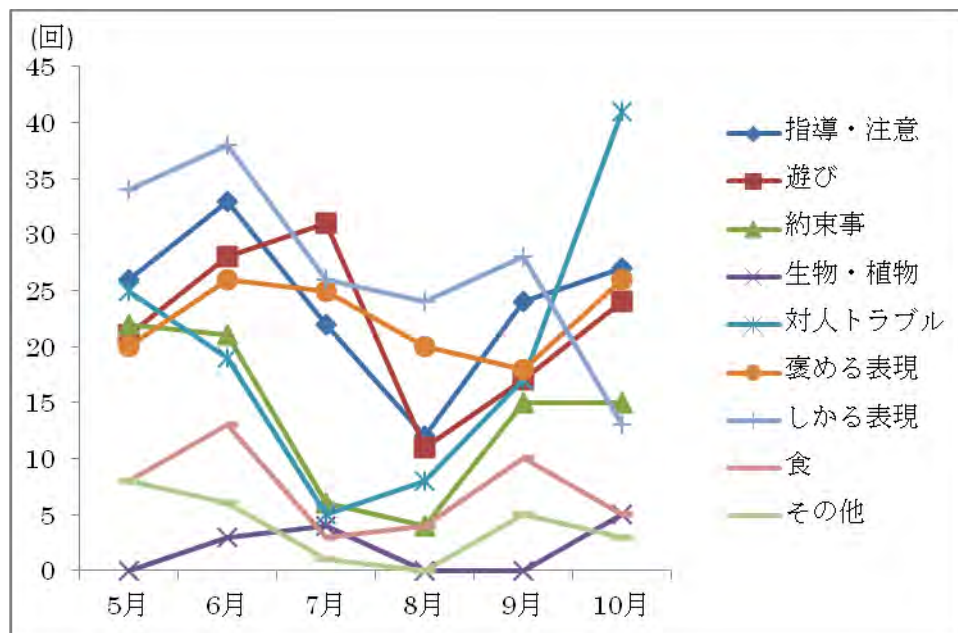


図 3-6 カテゴリー別話題出現数(回)

3-4-1 「指導・注意」のカテゴリー内の単純集計・出現数の変遷

各カテゴリー内の言葉の出現回数について、それぞれ集計し、カテゴリーごとの出現数の変遷を示す。

「指導・注意」のカテゴリーに関しては、カテゴリー内の言葉が『指導』『注意』『話を
する』等で、日報上の言葉によって意味に大差がないため、カテゴリー内の言葉の出現回
数については集計しない。

「指導・注意」のカテゴリーの出現数の変遷を図 3-7 に示す。夏休みの時期(7 月末～8 月
末)を除くと出現回数に大きな変化が見られなく、児童の成長や状況にあまり関係なく、指
導員は児童に「指導・注意」していることが分かる。

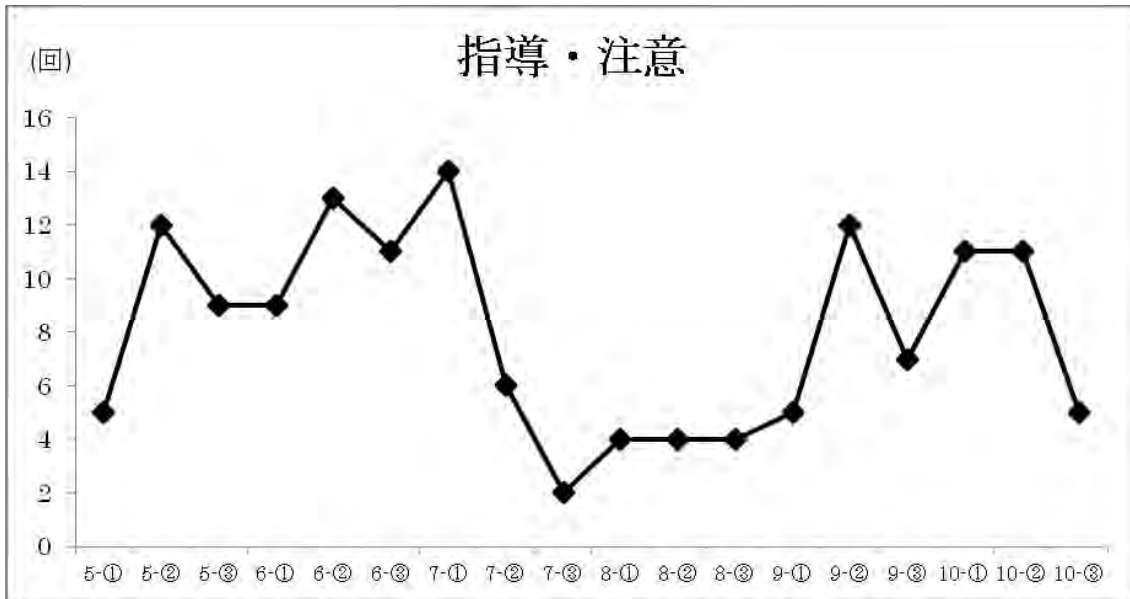


図 3-7 指導注意 出現数の変遷

3-4-2 「約束事」の категория内の単純集計・出現数の変遷

「約束事」の категория内の言葉の出現回数を図 3-8 に示す。

「いうことが聞けない」が一番多いが、日報中の文を見てみると、『自分の荷物がなかなか片づけられず、物にあたり、言うことができない。』や『〇〇君がふざけて、静かにするよう注意をするがなかなか言うことが聞けない』等、「いうこと」というのは様々な場合において用いられている。「宿題しない」も次に多い。また、「行ってはいけない所に行く」・「帰らない」・「片づけできない」等、遊びの時間の約束に関する言葉も多いこと、「ごちそうさましない」・「おやつの時座らない」等、おやつに関する言葉は少ないこと、の2点も特徴的である。

「約束事」の categoriaの出現数の変遷を図 3-9 に示す。6月末・7月初めには、夏休み前ということもあり、児童が落ち着かず、約束を守れないことが目立っている。

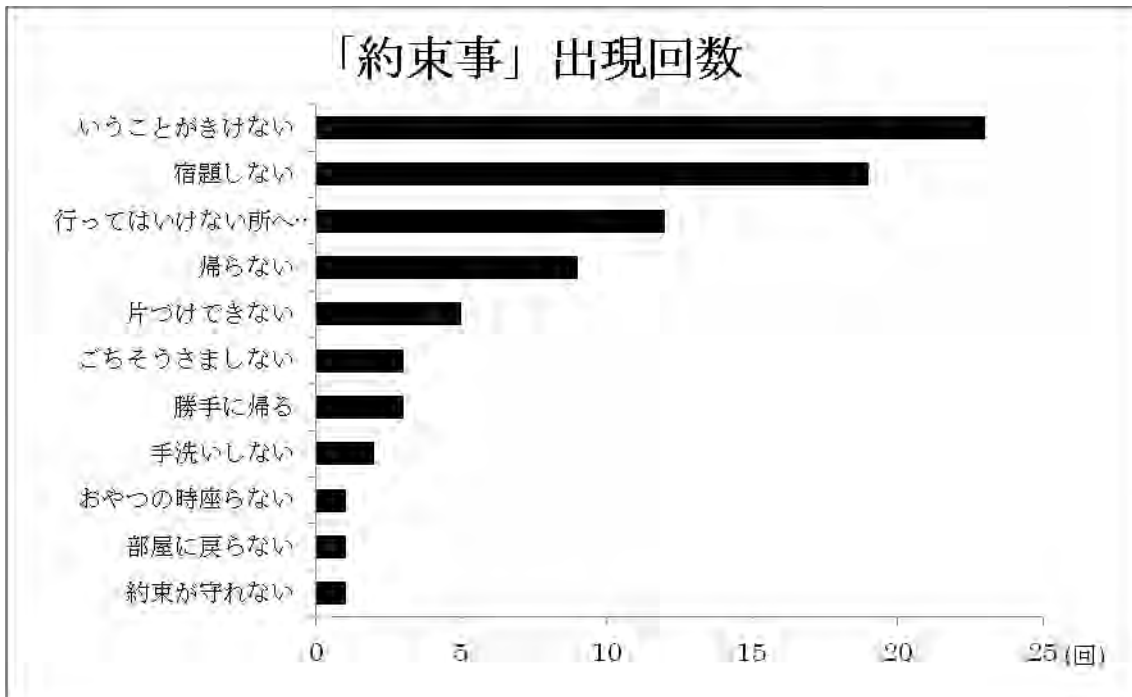


図 3-8 出現回数(約束事)

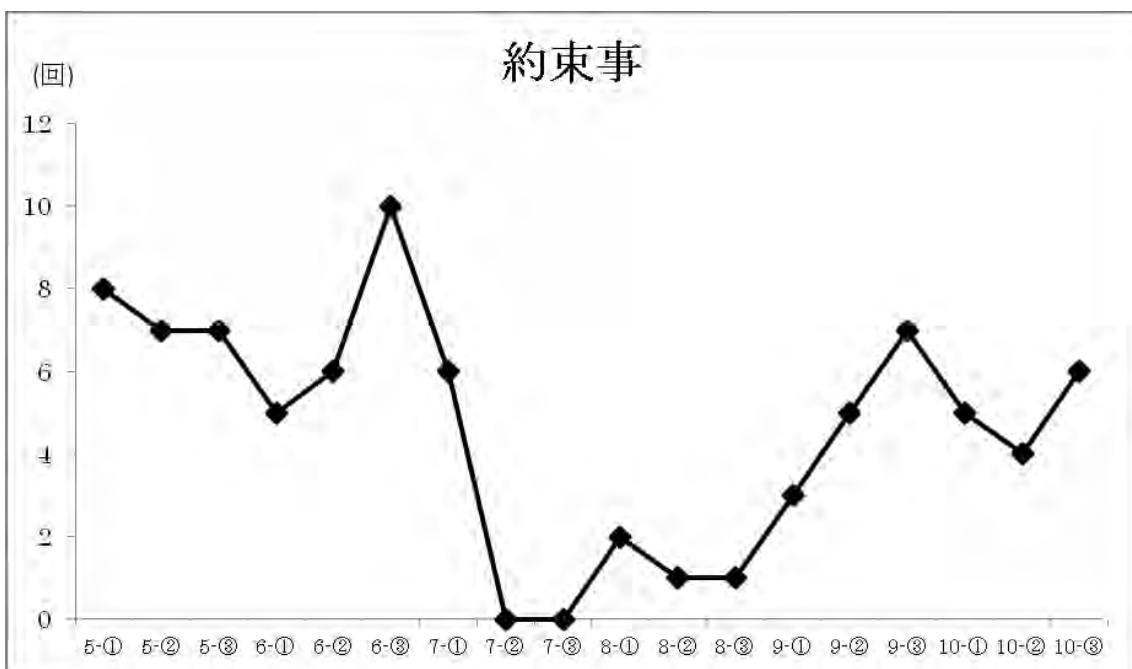


図 3-9 約束事 出現数の変遷

3-4-3 「遊び」の категория内の単純集計・出現数の変遷

「遊び」の категория内の言葉の出現回数について、図 3-10 に示す。

『木登り』・『サッカー』など男の子の遊びについての記述が多い。その他は、男女に共

通する遊技についてであった。

「遊び」のカテゴリの出現数の変遷を図 3-11 に示す。遊びの内容に関しては、夏休みの時期は別として、暖かくて児童のよく外遊びをする時期は多く出現し、秋に入っていくと段々少なくなっており、指導員は中での遊びより外遊びの時間に関して注目していたようである。

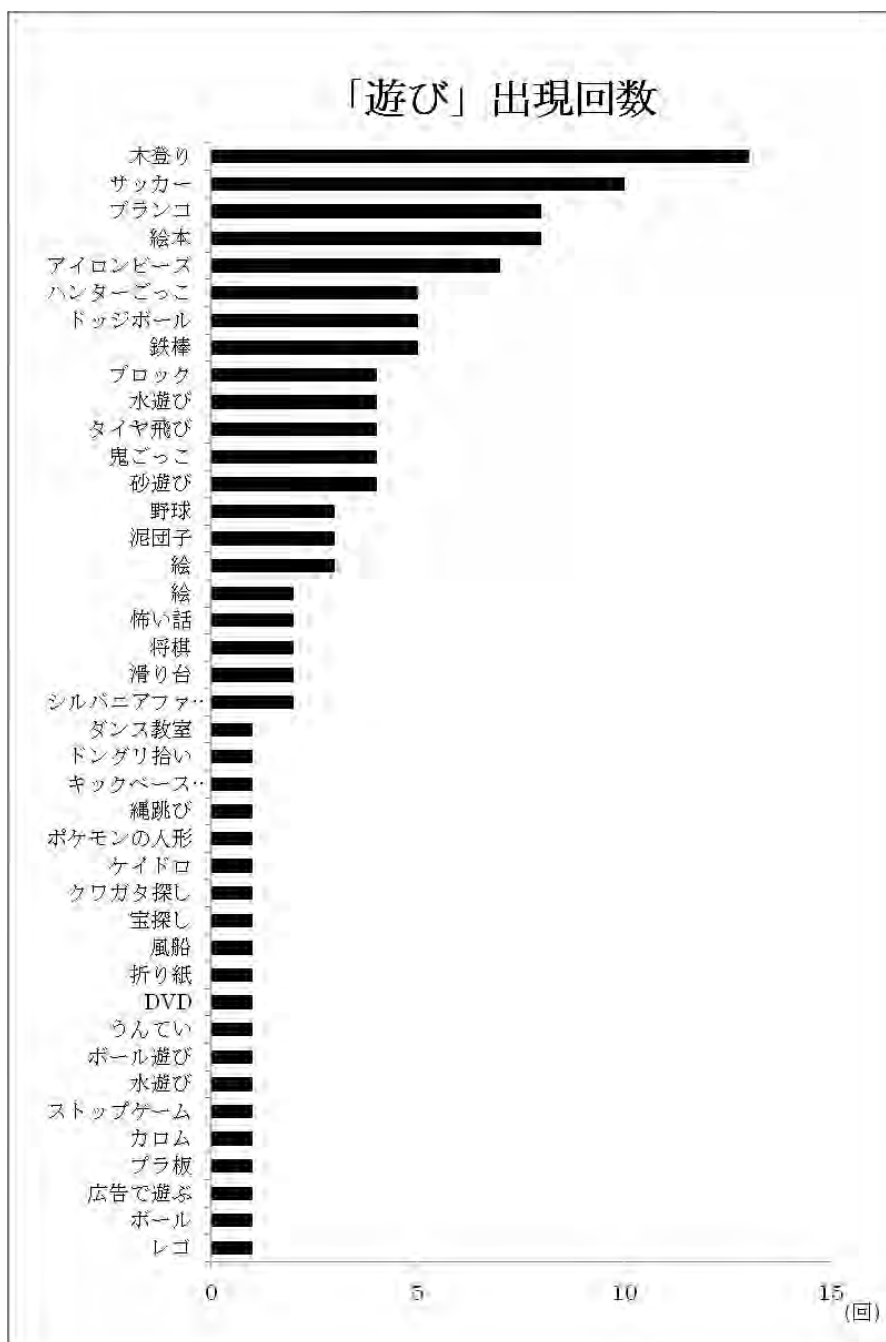


図 3-10 出現回数(遊び)

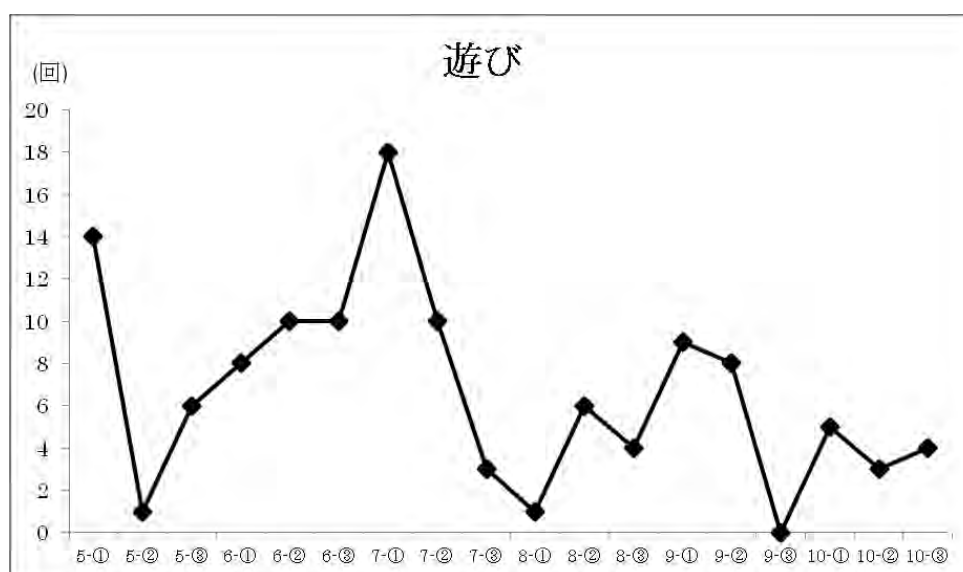


図 3-11 遊び 出現回数の変遷

3-4-4 「しかる表現」の 카테고리内の単純集計・出現数の変遷

「しかる表現」の 카테고리内の言葉の出現回数を図 3-12 に示す。

『落ち着かない』や『ふざける』、『騒ぐ』など、指導員が一見して分かるような事象について多く記述される傾向がある。しかし少ないが、『おやつの時間、○年生男子が食べ物をこぼしたり、食べ物で遊んだりしている。』等、食べ方に関してや遊び方など細かい事象についても記述されていることも読み取れる。

「しかる表現」の 카테고리の出現数の変遷を図 3-13 に示す。「しかる表現」(図 3-13)を見ると、出現数が多い時期と少ない時期が交互にきていることが分かる。これは、日報を記述していた 2 人の指導員が今までの日報を読んだ上で、悪い印象を与えるような記述が多い時期の次の時期には、「しかる表現」を控えて記述するようにして、日報の記述状況の印象のバランスをとっていたのではないかと推測される。

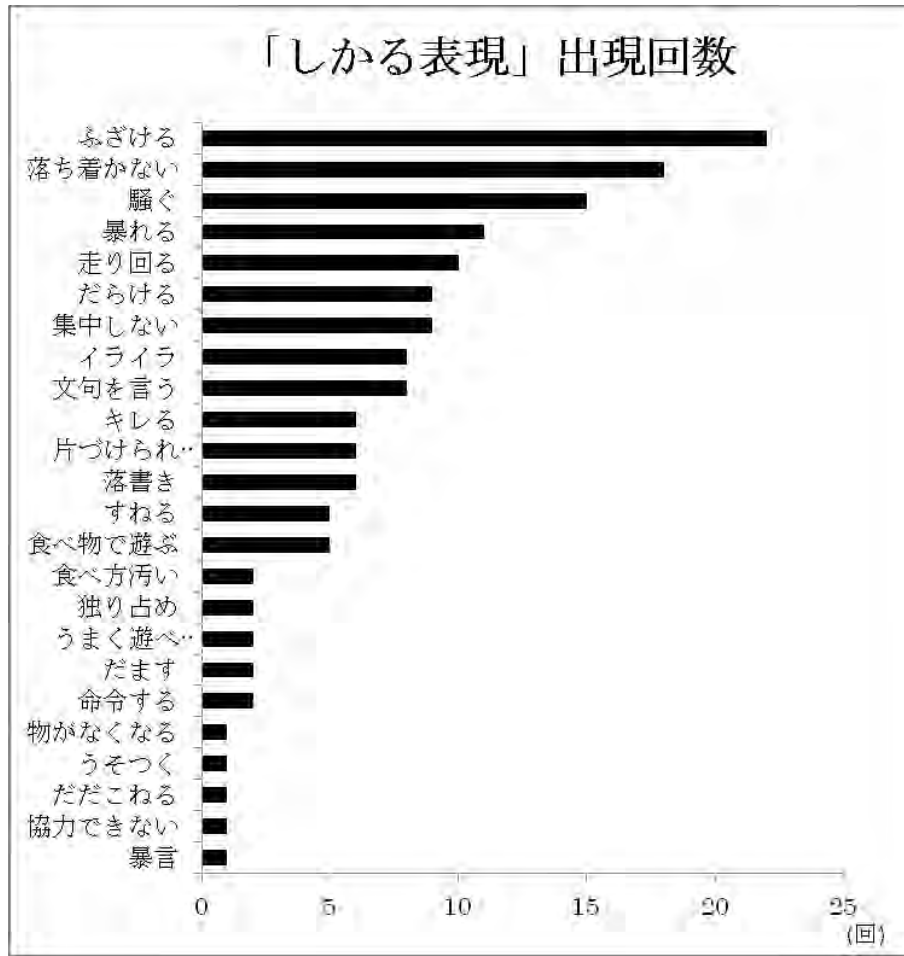


図 3-12 出現回数(しかる表現)

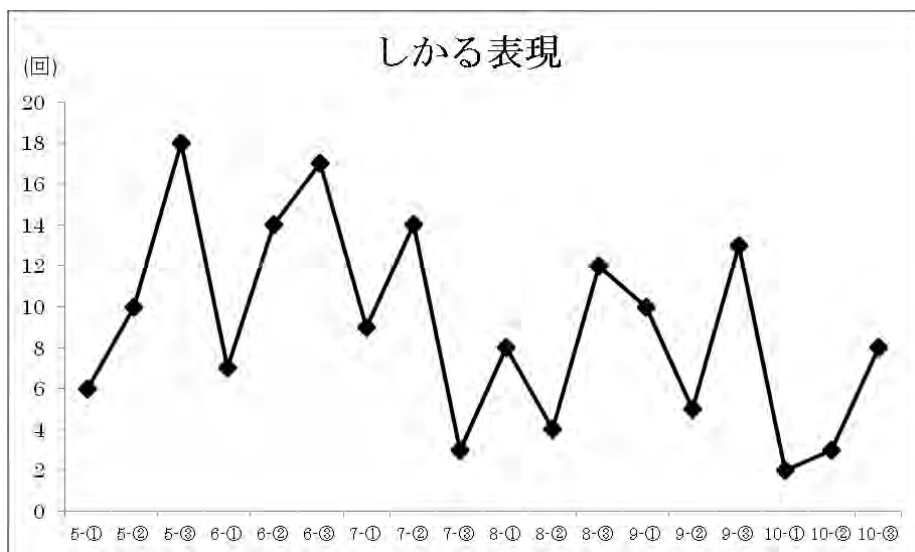


図 3-13 しかる表現 出現数の変遷

3-4-5 「褒める表現」のカテゴリー内の単純集計・出現数の変遷

「褒める表現」のカテゴリー内の言葉の出現回数について図 3-14 に示す。

『楽しむ』といった言葉が非常に多いことが分かる。児童の様子について記述する際に、『今日は、各学年がグループでサッカーや鬼ごっこ、タイヤ飛びなどをして楽しんでいた』という様に『楽しんでいた』という表現で締めくくる文章を多用している。指導員の児童に対する褒め方が『楽しんでいる』という表現に偏りすぎており、数多くある児童の褒めるポイントを見逃しているのではないかと、という印象を受ける。しかし、普段の参与観察では、指導員と児童の様子を見たり指導員同士の会話を聞いていると、日報に記述されている様な傾向ではなく、もっと他のことに対しても褒めたり、評価したりしている。これは、日報に載る「褒める表現」にのみ偏りがあるのだと考える。原因は、褒める出来事を詳細に書いていくほどの余裕がないということ、児童の様子で特記すべきは、児童の成長を感じたり、良いことをした内容よりも、喧嘩やルールを破ることの方であると考えていることにあると考える。

「褒める表現」のカテゴリーの出現数を図 3-15 に示す。「褒める表現」に関しては、夏休みであっても関係なく大きな変化がない。図 3-14 と合わせて見ると、主に児童が楽しんでいる様子に関しては、調査期間をつうじて一定量記述されていることが分かる。

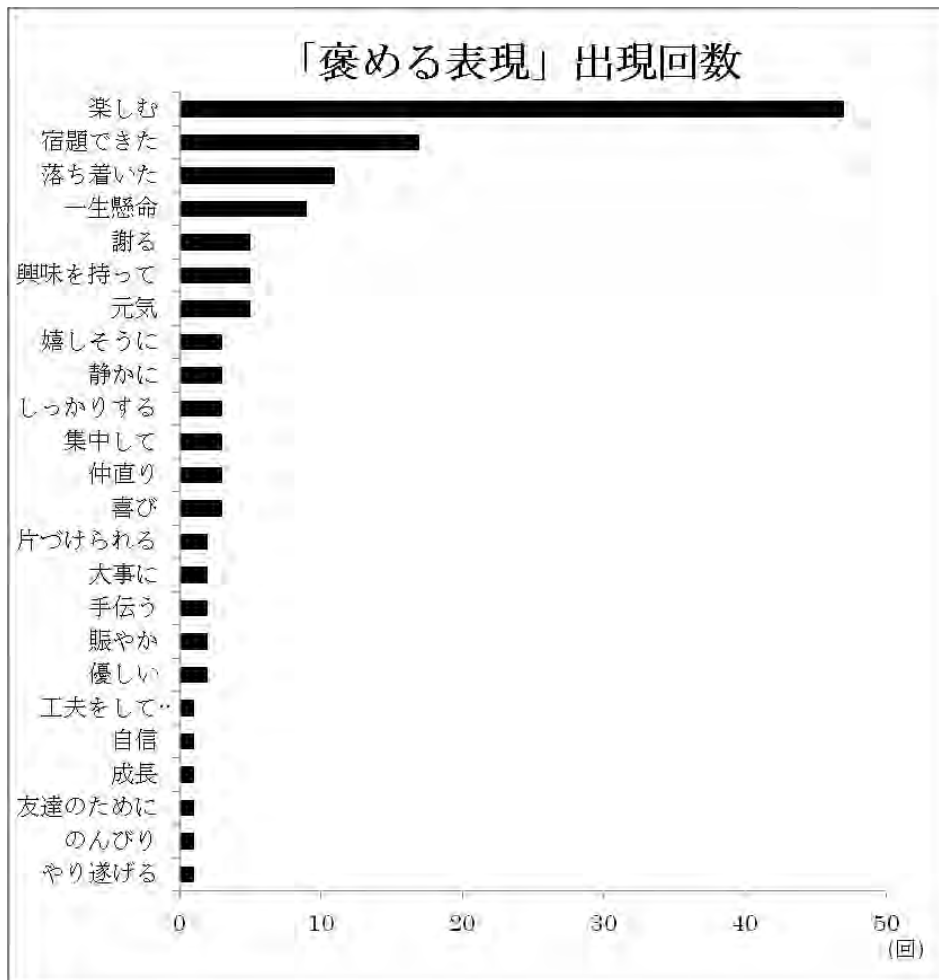


図 3-14 出現回数(褒める表現)

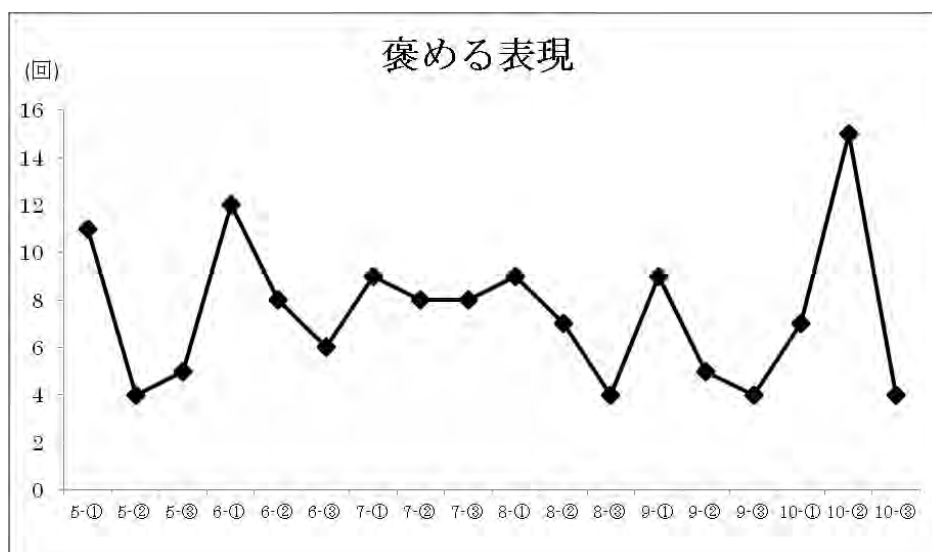


図 3-15 褒める表現 出現数の変遷

3-4-6 「対人トラブル」の 카테고리内の単純集計・出現数の変遷

「対人トラブル」の 카테고리内の言葉の出現回数について図 3-16 に示す。

喧嘩やそれに関する記述(たたく・ける等)が多く、放課後児童クラブ内での大きな騒ぎに目が行きやすい傾向にあることが考えられる。

「対人トラブル」の 카테고리の出現数の変遷を図 3-17 に示す。9月から10月にかけて対人トラブルが多くなる。これは、前半は、まだ知らない・仲良くない児童がいたため対人関係でのトラブルは少ない傾向であったが、夏休みで長時間を共有し、遊ぶ友達が増えたため、児童同士での衝突が多くなったと推測される。

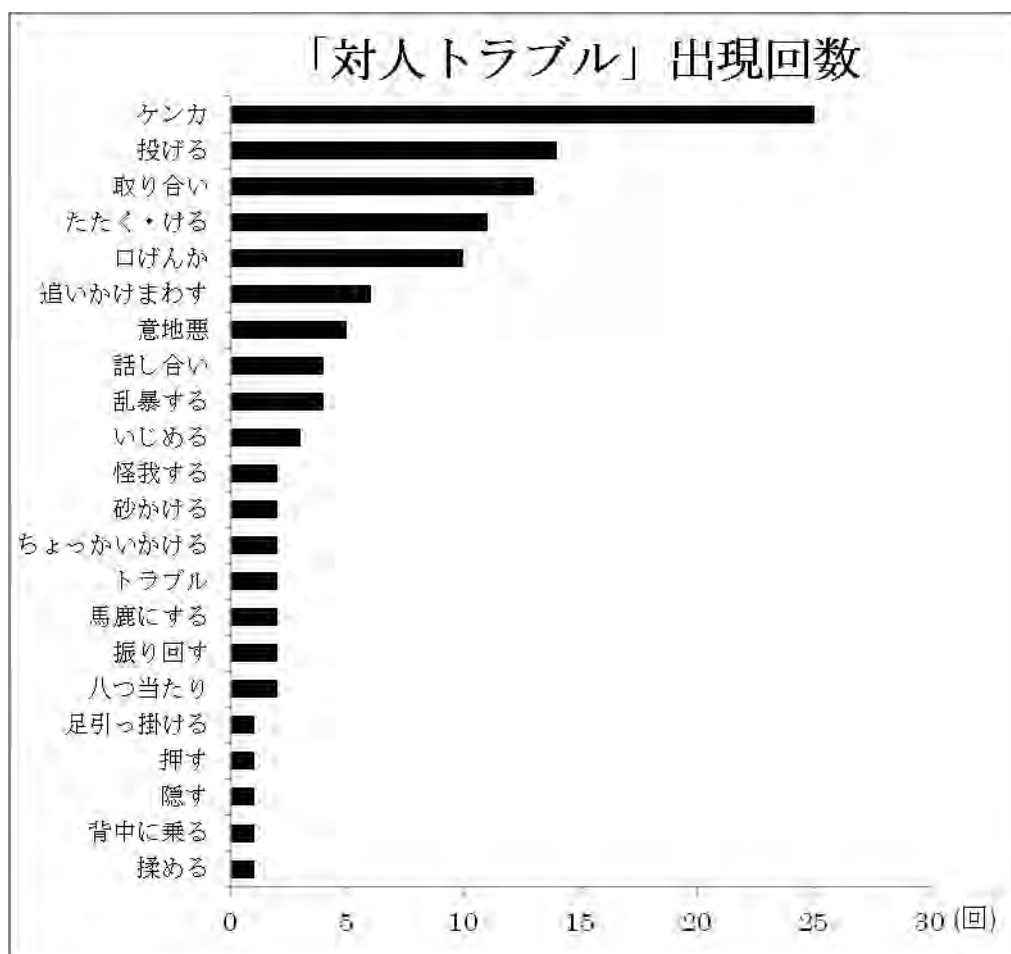


図 3-16 出現回数(対人トラブル)

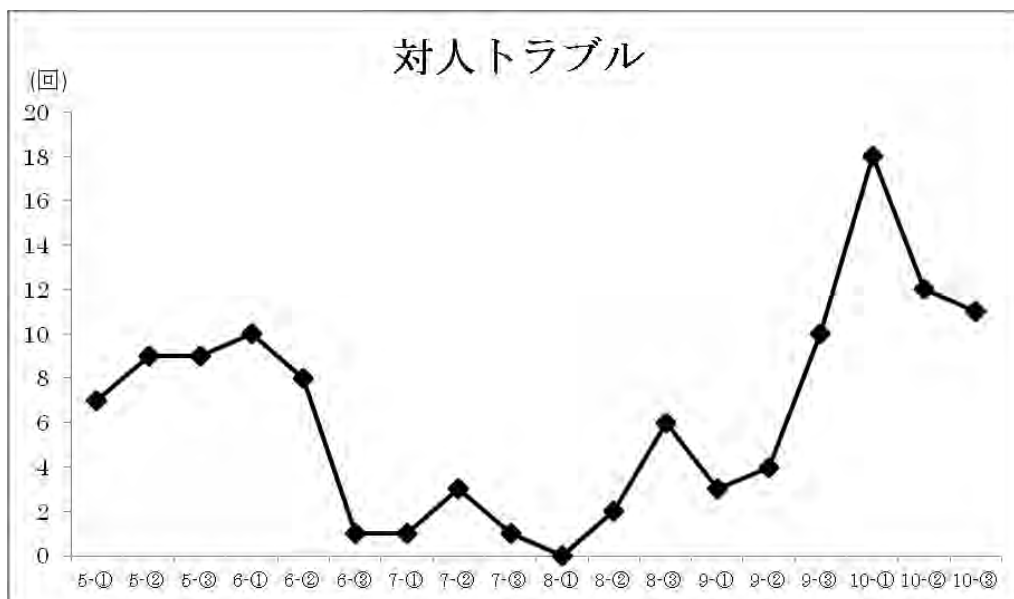


図 3-17 対人トラブル 出現数の変遷

3-4-7 「食」の 카테고리内の単純集計・出現数の変遷

「食」の 카테고리内の言葉の出現回数について図 3-18 に示す。

『おやつ』が総出現数 44 回と非常に多い。これは、他 카테고리を合わせても 2 番目に多い出現数である。これより、おやつの時間に関して取り上げられている事象は少ないことが分かる。

「食」の 카테고리の出現数の遷移を図 3-19 に示す。「食」の出現率が 6 月末に最も多く、この時期はほぼ毎日出現しているようだ。

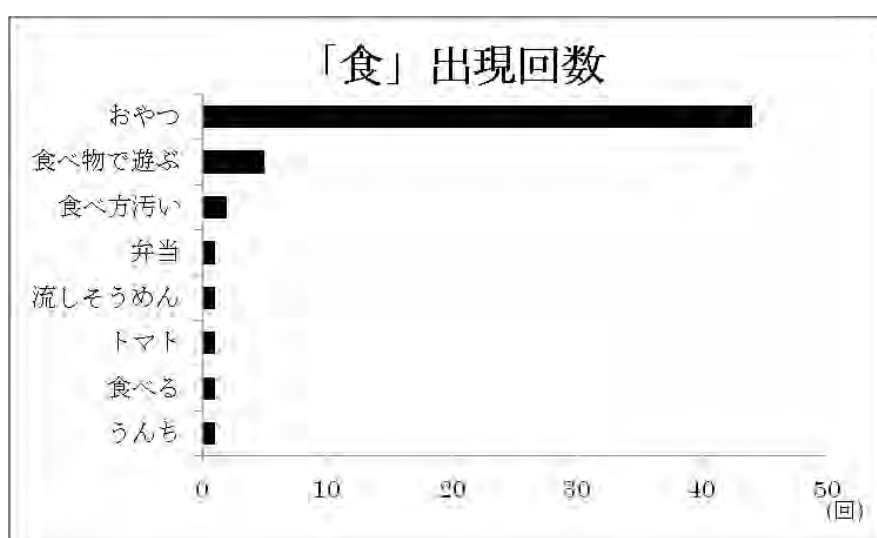


図 3-18 出現回数(食)

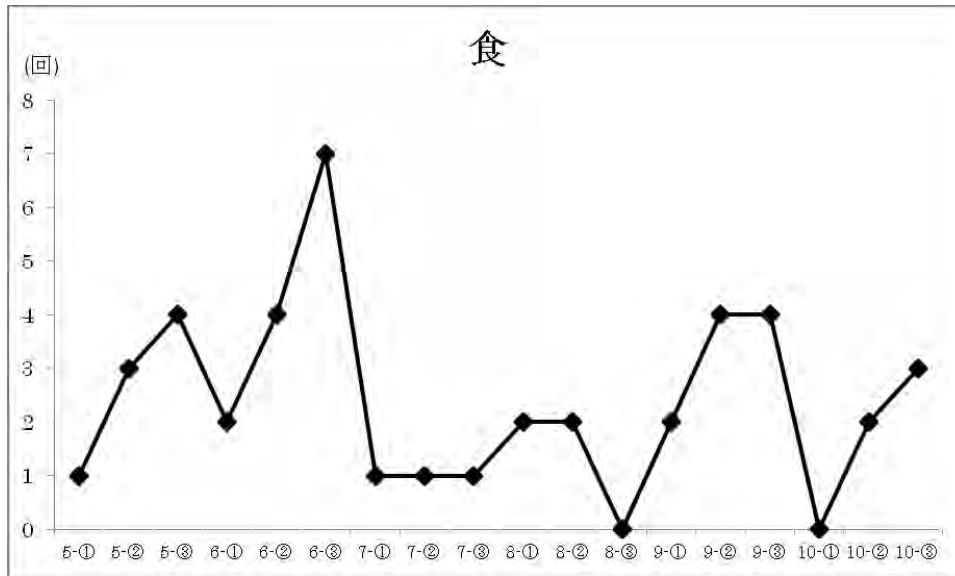


図 3-19 食 出現数の変遷

3-5 話題ごとの集計から分かる記述傾向

3-5-1 「褒める表現」と「しかる表現」の関係性

出現数の変遷の図で1つの期間ごとの落差が激しい2つのカテゴリー、「褒める表現」と「しかる表現」の図の比較をするために、図3-20を作成した。これを見ると、「ほめる表現」が多い時期は「しかる表現」が少なく、「褒める表現」が少ない時期は「しかる表現」が多いことがよく見られる。しかし、実際に指導員という立場から放課後児童クラブで観察していると、放課後児童クラブではほぼ毎日、多くのトラブルと多くの褒めるような事象が起きていると感じた。

以上2点から考えて、指導員はその日にあった事象を無作為に選んで記述しているわけではなく、今までの日報を読み、その日の放課後児童クラブに対する印象が偏り過ぎないように、数日間単位で日報内での児童の評価のバランスを取ろうと記述していることが推測される。

夏休みを除くと、「褒める表現」と「しかる表現」は、7月前半(7-①)と9月中旬(9-②)にのみ同じ出現数である。後に載せる話題相関図と合わせて見ると、この時期は、2つのカテゴリーのつながりが非常に強いことが分かる。

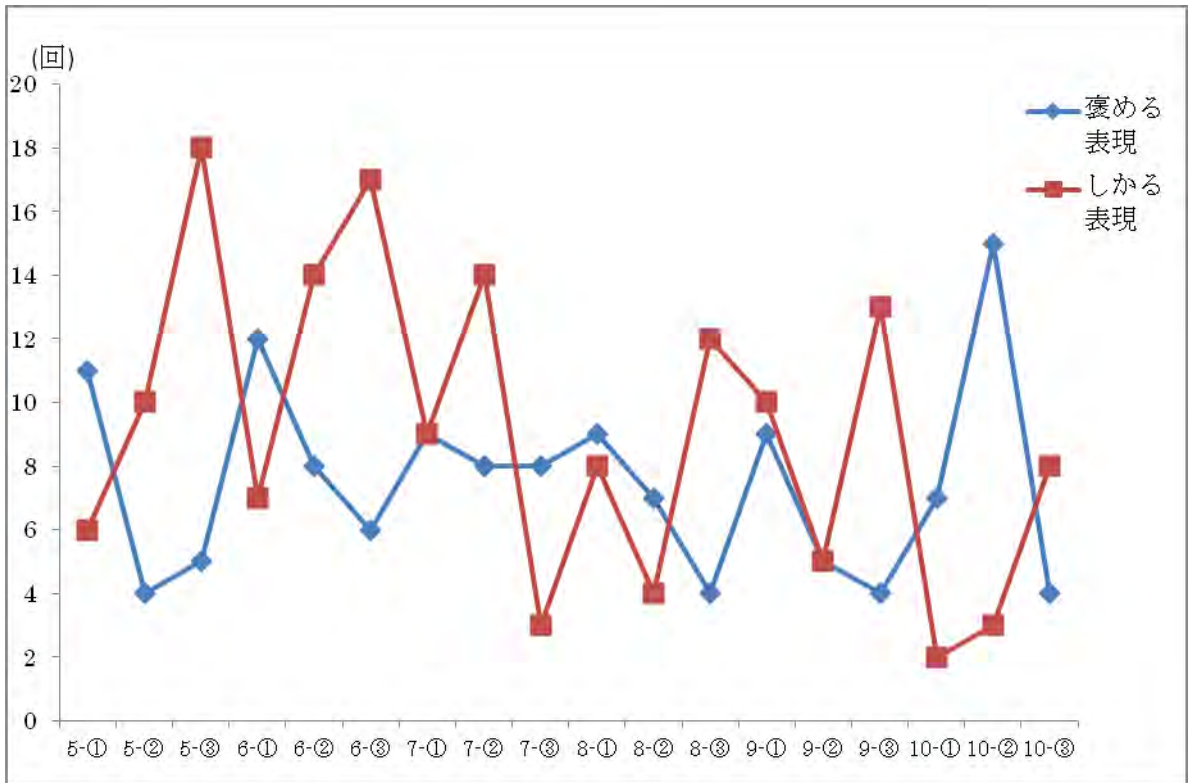


図 3-20 「褒める表現」「しかる表現」比較

3-5-2 「褒める表現」の偏りと指導員の評価方法

カテゴリーごとの集計を行った結果、児童の評価や児童どうしで起きたトラブル、指導した点、児童がどんな遊びをしたか、楽しそうだという記述がとても多かった。児童の成長や仲よくしている様子などが含まれる、「褒める表現」に関しては、『今日は、各学年とも楽しく過ごすことができました』という様に、『楽しむ』といった記述がほとんどであったことから、日報上での児童を褒める評価は記述しにくいと推測される。理由は、『3年生は校外学習で疲れているせいか、帰ってきてもダラダラしたり、指導員の言うことが聞けなかったり、約束が守れなかったりしたので何度も繰り返して、出来るまで話をしていく』というように、児童が起こす問題やもめ事に対して、児童を指導し、どのように評価したかが目立つため、そちらを優先的に書く傾向があるからであろう。

すなわち、児童の成長や自立の手助けとなる情報のほとんどは口伝えで済まされていることが分かる。

3-6 各月ごとの記述傾向(話題相関図・個人の出現数)

2010年度の5月から10月の半年間の日報の記述傾向を以下に示す。

3-6-1 5月

5月での全文章の数と、個人を表記された文章の数，男女比を表3-6に示す。

表 3-6 5月 個人を表記された文章

	全文章	個人を表記された文章	男(回)	女(回)
5月	71	28	39	2
5月①	23	7	8	0
5月②	24	8	12	1
5月③	24	13	19	1

次に，5月の日報の動向を図3-21に示す。

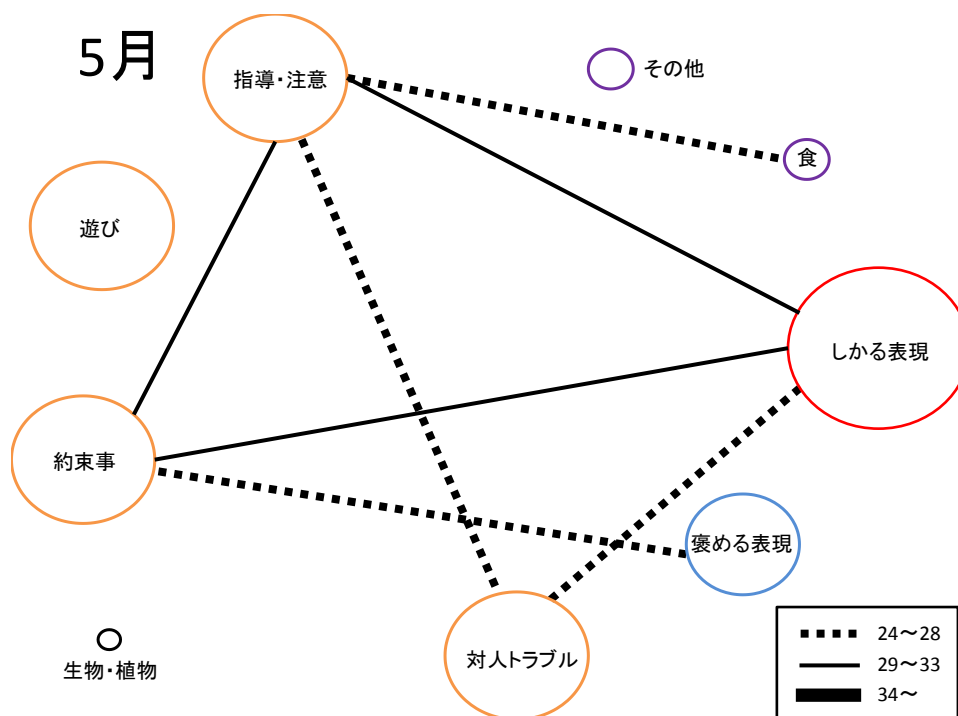


図 3-21 5月 日報動向

5月は，全体的に「しかる表現」の出現率が目立って多い。また，個人を表記した文章に関しては後半が多いことも特徴的である。

以下，5月を6日間ごとに分けた話題相関図を図3-22，図3-23，図3-24に示す。

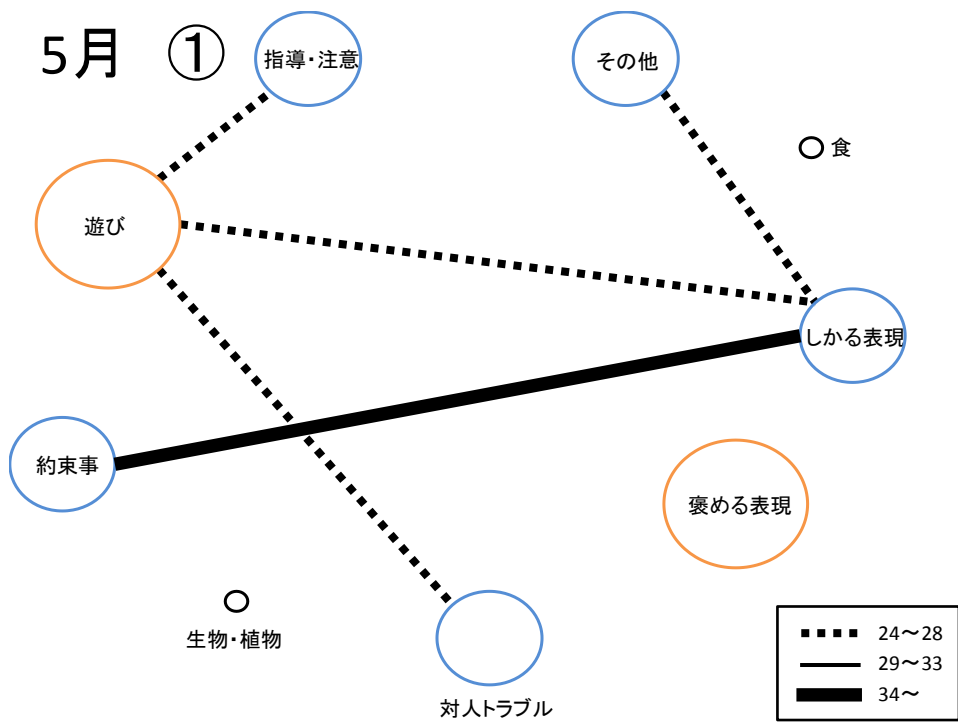


図 3-22 5月①(5/6~5/12 6日間)の話題相関図

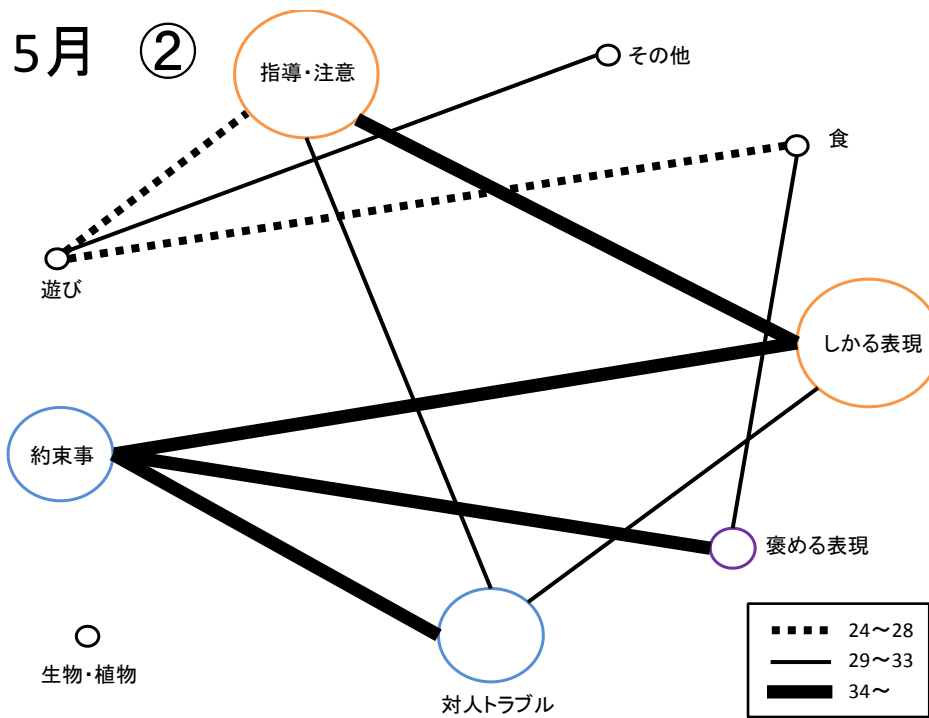


図 3-23 5月②(5/14~5/21 6日間)の話題相関図

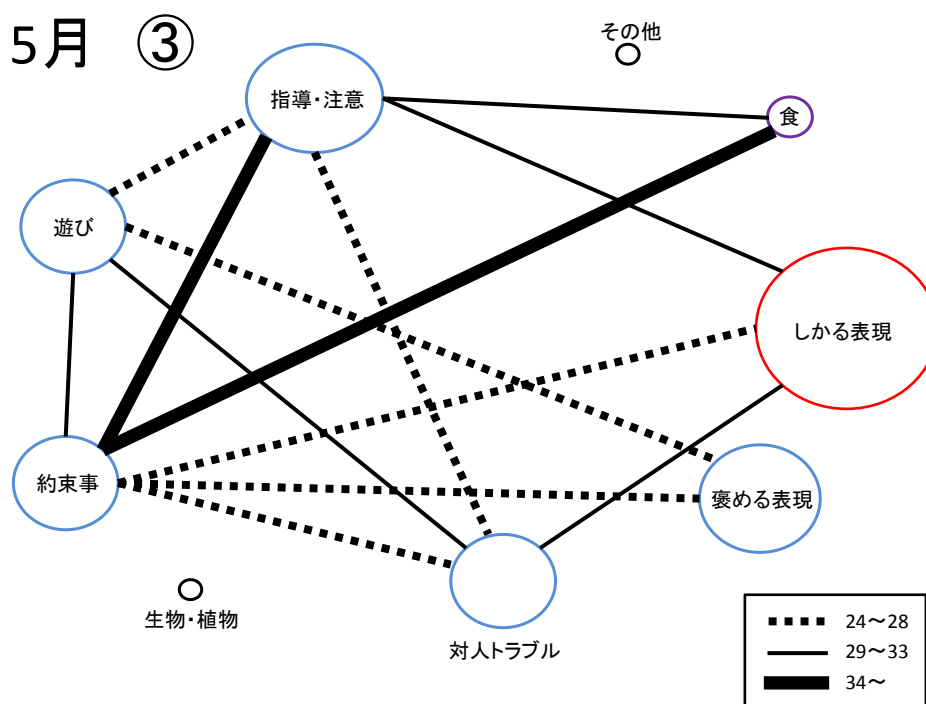


図 3-24 5月③(5/24~5/31 6日間)の話題相関図

5月6日~5月12日の6日間の動向を図3-22に示す。

遊びの時間についての事象が多く、それに強い相関関係が見られるものが多い。また、褒める事象をよく取り上げられることが多いが、褒める表現の категорияに相関関係が見られるものがないことも特徴として見られる。

以上より、5月の上旬は、ゴールデンウィーク中なので、児童が落ち着きを失っていると指導員が考え、遊びの時間に起きる問題を多く取り上げていると推測する。そして、その代わりに、他の時間では児童の良い事象を取り上げているのだらうと考える。

次に、5月14日~5月21日の6日間の動向を図3-23に示す。

5月中旬は、ゴールデンウィーク明けのため、児童全体として落ち着きがない。また、ヒアリングによると、この時期は小学校教師と放課後児童クラブ指導員との間で、児童の現状や指導方針に関しての話し合いが行われ¹⁾、大人の児童への対応が変わり、それによって児童がストレスを感じることもある。そのことから、問題となる事象、特に児童クラブでの約束を破るような事象が記述されている傾向が目立つ。

続けて、5月24日~5月30日の6日間の動向を図3-24に示す。

5月下旬も、『〇〇君...安定して落ち着いていたが、最近はいライラしていることが多い。物を投げたり、話をしてもふざけて話を聞こうとしない』、『宿題・おやつ時間になかなか落ち着くことができない』等、引き続きゴールデンウィークとPTA総会の影響が児童に表れているようである。しかし後半では中旬と違い、『2年生の女の子の間で鉄棒が流行っていて、手にまめができるほど頑張っている姿が見られる』の様に、遊びの時間で良い評

価をしている割合が多いことが分かる。

3-6-2 6月

6月での全文章の数と、個人を表記された文章の数，男女比を表3-7に示す。

表 3-7 6月 個人を表記された文章の数

	全文章	個人を表記された文章	男(回)	女(回)
6月	90	24	50	3
6月①	30	8	18	0
6月②	31	8	19	1
6月③	29	8	13	2

次に，6月の日報の動向を図3-25に示す。

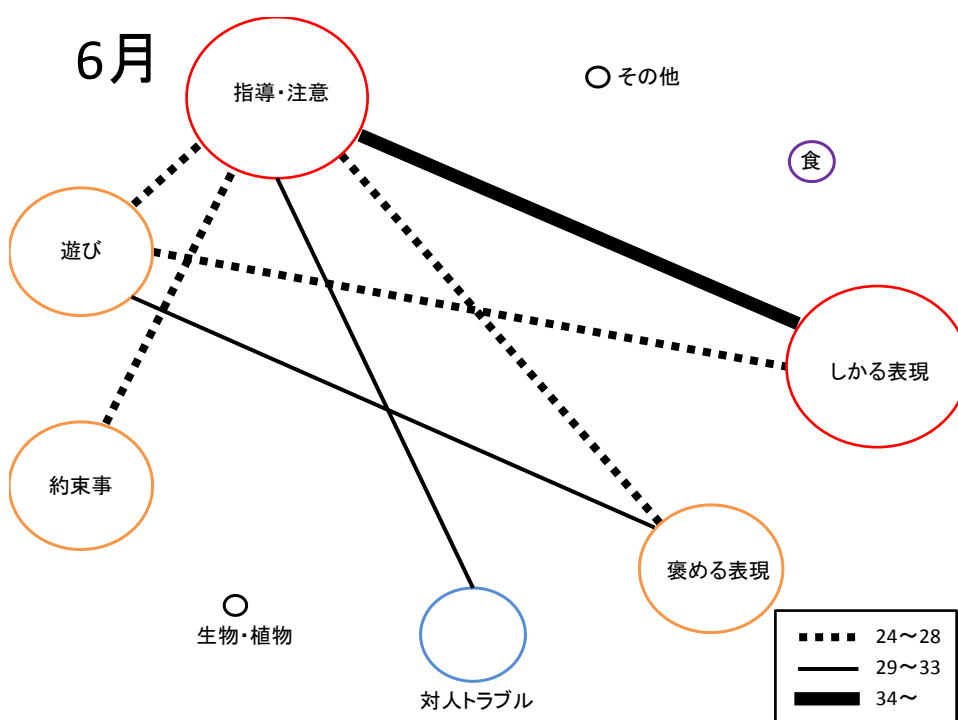


図 3-25 6月 話題相関図

6月は、「指導・注意」-「しかる表現」間の強い相関が見られ，2つのカテゴリーの出現数も非常に多く，『○

年生の男子が，砂場で砂のかけ合いをしており，目や耳に入ると危ないのでやめるよう注意する.』のよう記述が多い。

以下，6月を7日ごとに分けた話題相関図を図3-26，図3-27，図3-28に示す。

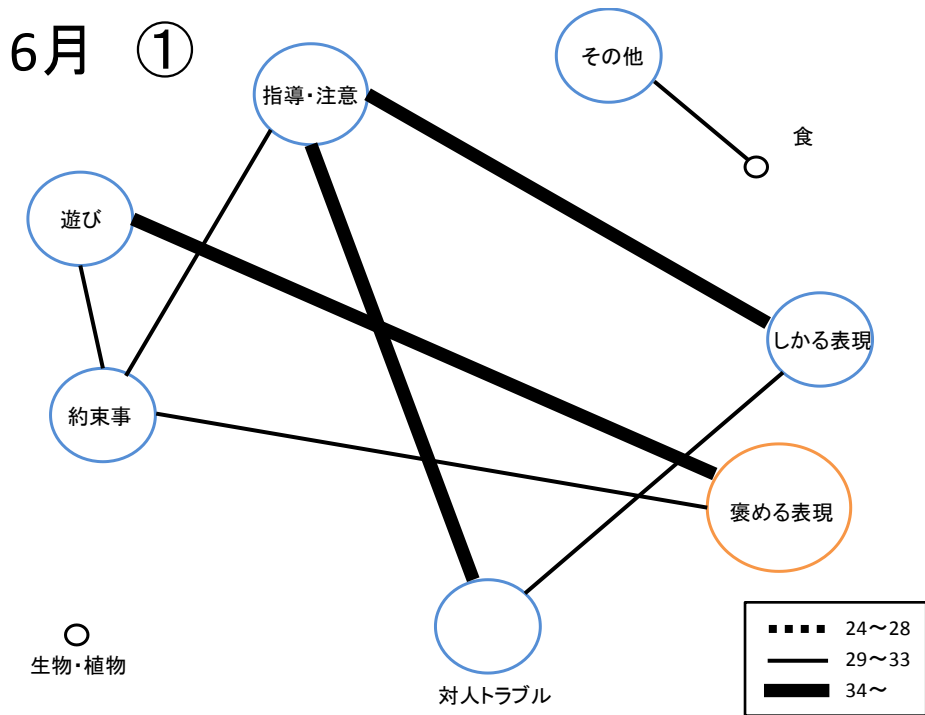


図 3-26 6月①(6/1~6/9 7日間)の話題相関図

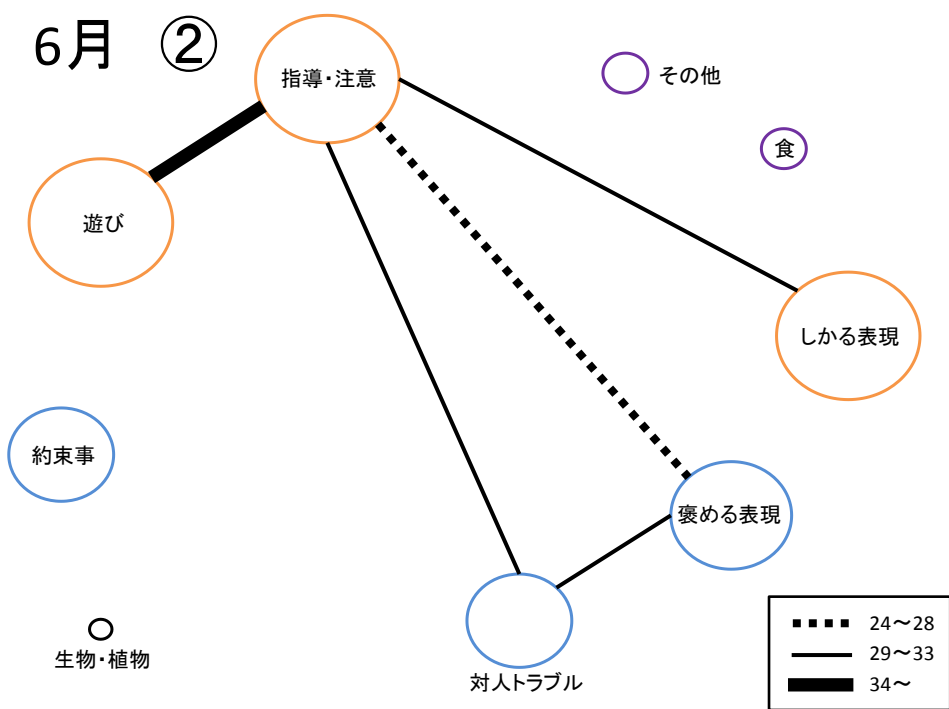


図 3-27 6月②(6/10~6/18 7日間)の話題相関図

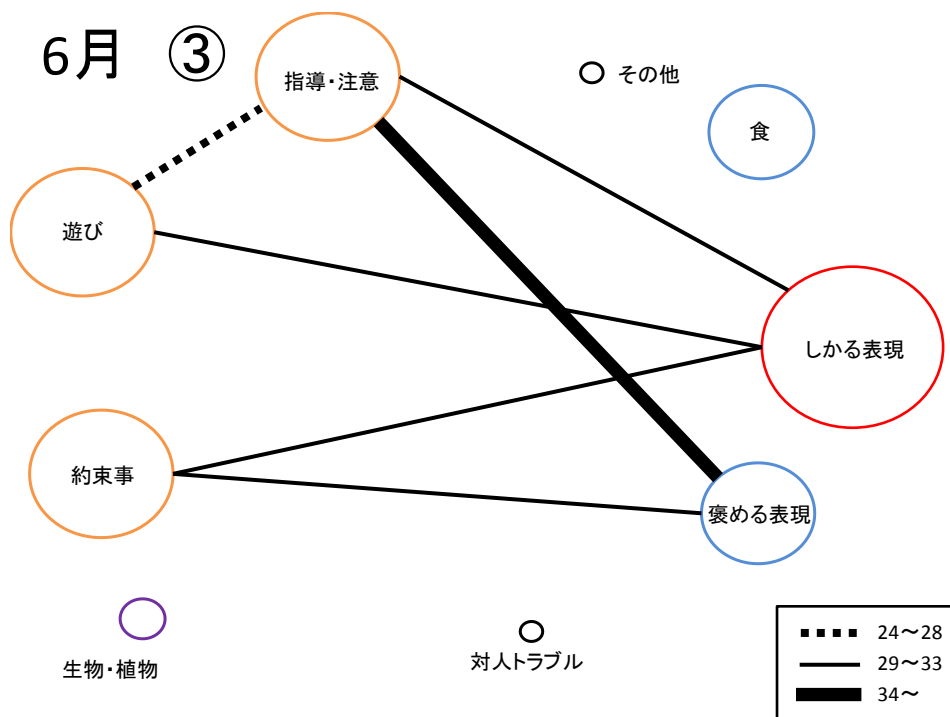


図 3-28 6月③(6/22～6/30 7日間)の話題相関図

6月1日～6月9日の7日間の動向を図3-26に示す。

全体的に1つの文章が長く、事例を説明する記述が多く、出現する話題の総数が少ない。また、「指導・注意」－「しがる表現」－「対人トラブル」間で、強い相関が見られる。以上のことから、1日につき1つの事象について指導や評価をじっくり書いていることが分かる。また、『〇〇君、2年生男子がサッカーしているのを見ていたところ、サッカーをしている△△君に何度も誘ってもらい、サッカーをやり始め楽しく一緒に遊ぶことが出来た。』『〇年生男子チームでドッジボールを始めていたのだが、いつもメンバーに入らない子もチームに入れてもらい楽しく遊べていた』等、遊びの時間で良い評価をしている記述がよく見られる。

次に、6月10日～6月18日の7日間の動向を図3-27に示す。

全体的に記述されている量が増えている。特に「しがる表現」の出現率が多い。指導員から見た問題となる事象が後半になるにつれて多くなっているようだ。

また、3日ほど連続で雨が続いた時期もあり、指導員の良く見える室内で遊ぶことが多いため、遊びの時間での「指導・注意」が目立ったことが分かる。

次に、6月22日～6月30日の7日間の動向を図3-28に示す。

6月下旬も中旬に引き続き、全体的な記述量が多い。これは、『水を運ぶ遊びをして楽しんでいる子どもがいました。』や『今日はおやつがスペシャルのため喜んでいました。』、『〇〇さん…ポケモンの人形を投げて人に当てて遊んでいたので指導しました』等の様に、短文の記述が多いことからであろう。

また、「指導・注意」-「褒める表現」間の相関が非常に強いため、指導した内容が書かれている日にはほぼ毎日良い評価をしていることが分かる。

3-6-3 7月

7月での全文章の数と、個人を表記された文章の数，男女比を表3-8に示す。

表 3-8 7月 個人を表記された文章

	全文章	個人を表記された文章	男(回)	女(回)
7月	79	18	23	2
7月①	24	6	4	2
7月②	26	6	13	0
7月③	29	6	6	0

次に、7月の日報の動向を図3-29に示す。

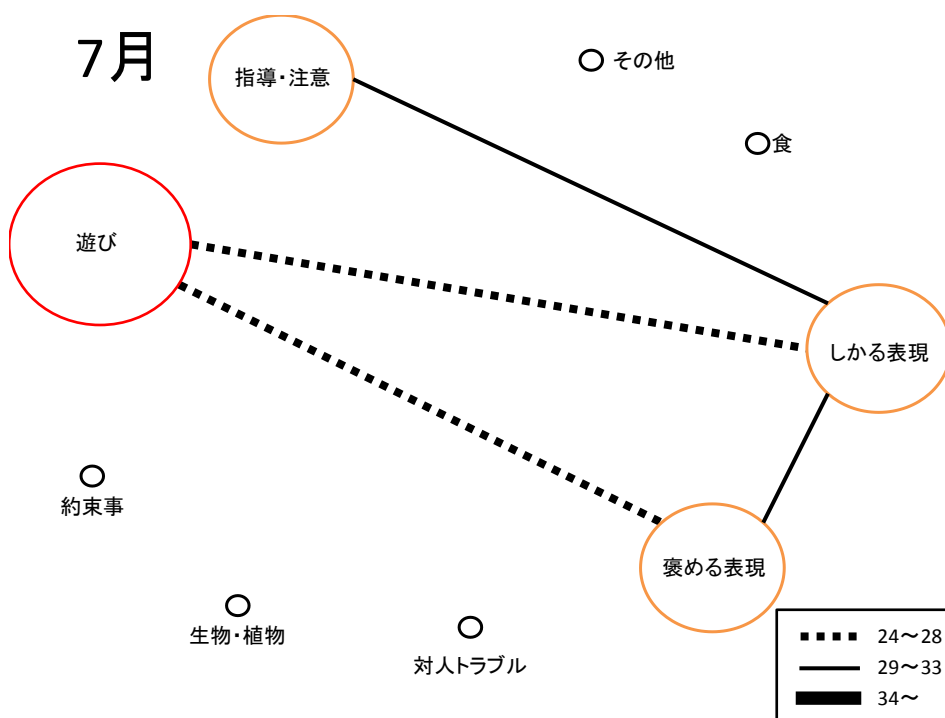


図 3-29 7月 話題相関図

7月中旬以降は夏休み期間が入ってくるので、日報では児童の様子や、児童クラブの全体の雰囲気などに関する記述より、普段行われないような特別な行事の連絡や全体を通しての報告が主になっているため、話題間の相関関係が弱いことが多く、全体の出現頻度も少なくなる。それによって、全体として見た際、全体的に相関が弱く、出現数も減っている。

また、個人の出現数にもその影響が出ており、少ない。

以下、7月を7日間ごとに分けた話題相関図を図3-30、図3-31、図3-32に示す。

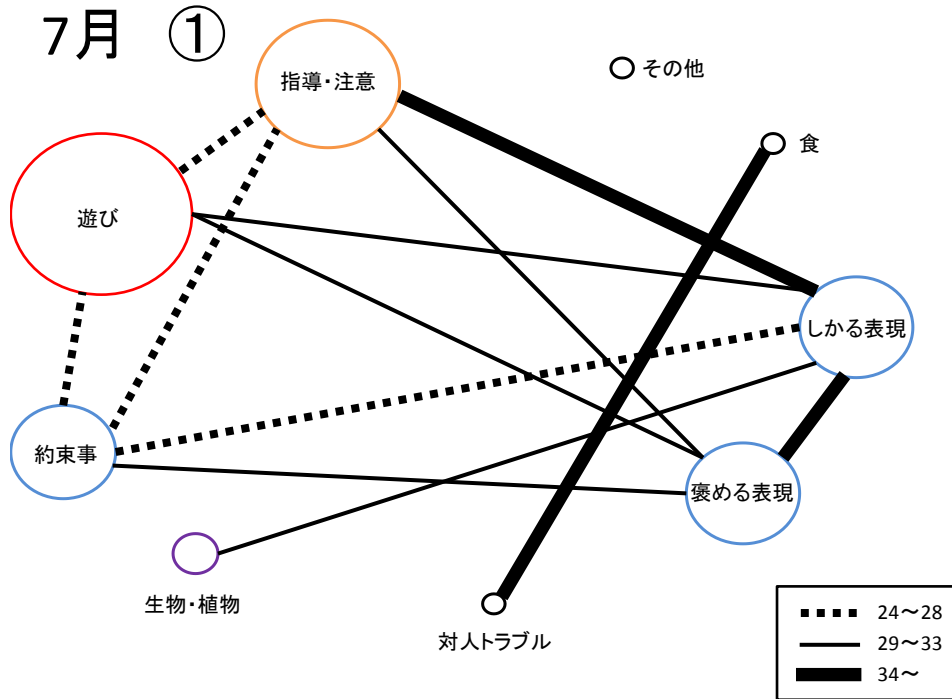


図 3-30 7月①(7/1~7/9 7日間)の話題相関図

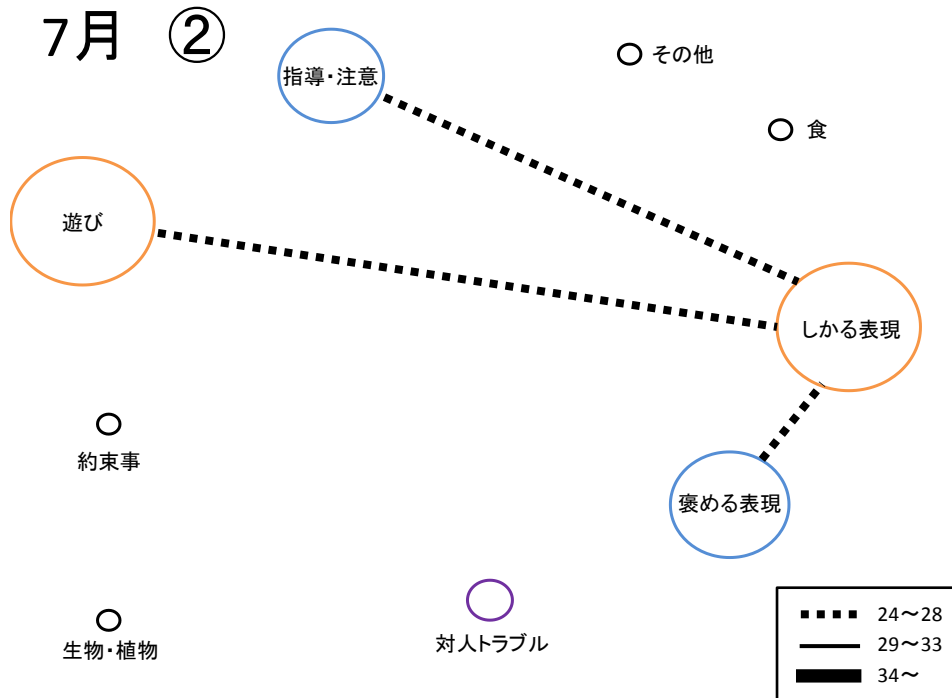


図 3-31 7月②(7/12~7/21 7日間)

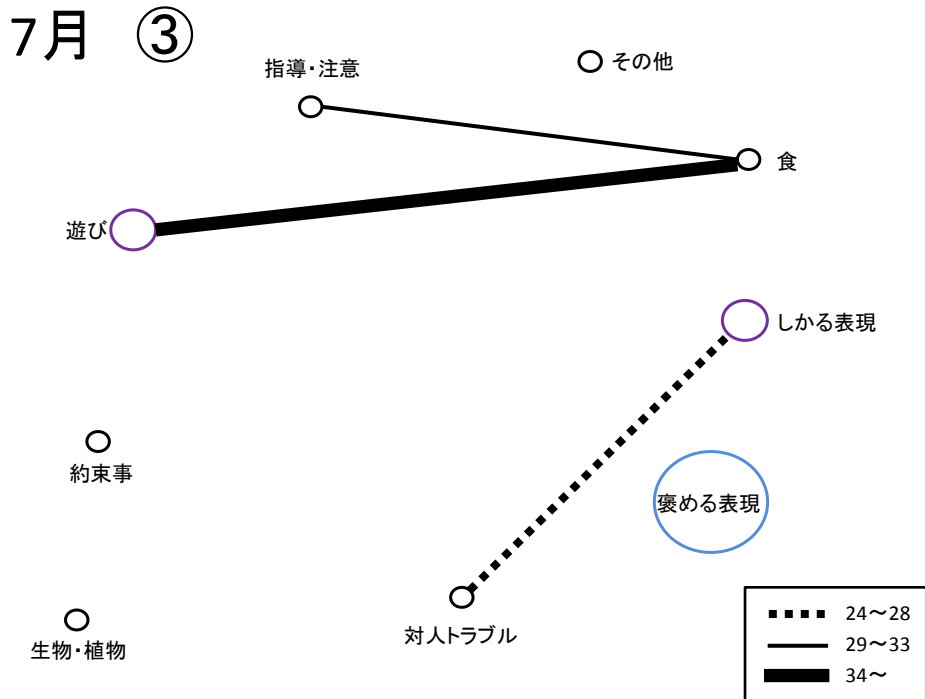


図 3-32 7月③(7/22~7/30 7日間)

7月1日~7月9日の7日間の動向を図3-30に示す。

7月の上旬は、夏休み直前なので全体的に児童が落ち着かないので指導を受けたり、評価を受けたりする内容が目立つ半面、遊ぶ時の児童の楽しそうに遊ぶ様子もまた良く見られたようだ。「しかる」-「褒める」の相関関係がとても強いことからほぼ毎日、良い評価も悪い評価も記述しており、バランス良く児童を評価できているようだ。

3-6-4 8月

8月での全文章の数と、個人を表記された文章の数、男女比を表3-9に示す。

表 3-9 8月 個人を表記された文章の数

	全文章	個人を表記された文章	男(回)	女(回)
8月	71	14	29	3
8月①	26	7	14	0
8月②	25	2	5	0
8月③	20	5	10	3

次に、8月の話題相関図を図3-33に示す。

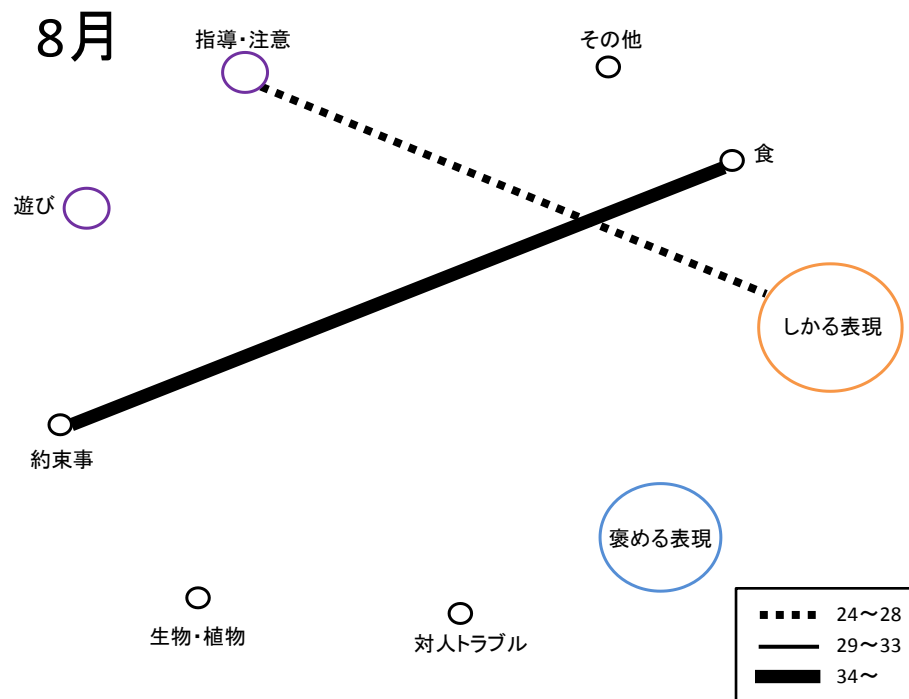


図 3-33 8月 話題相関図

8月についても7月中旬以降同様、普段行われない行事や全体を通しての報告についての連絡が主となっており、日報では児童の様子や、児童クラブの全体の雰囲気などに関する記述が少ない。

以下、8月を7日間、7日間、6日間に分けた話題相関図を図3-34、図3-35、図3-36に示す。

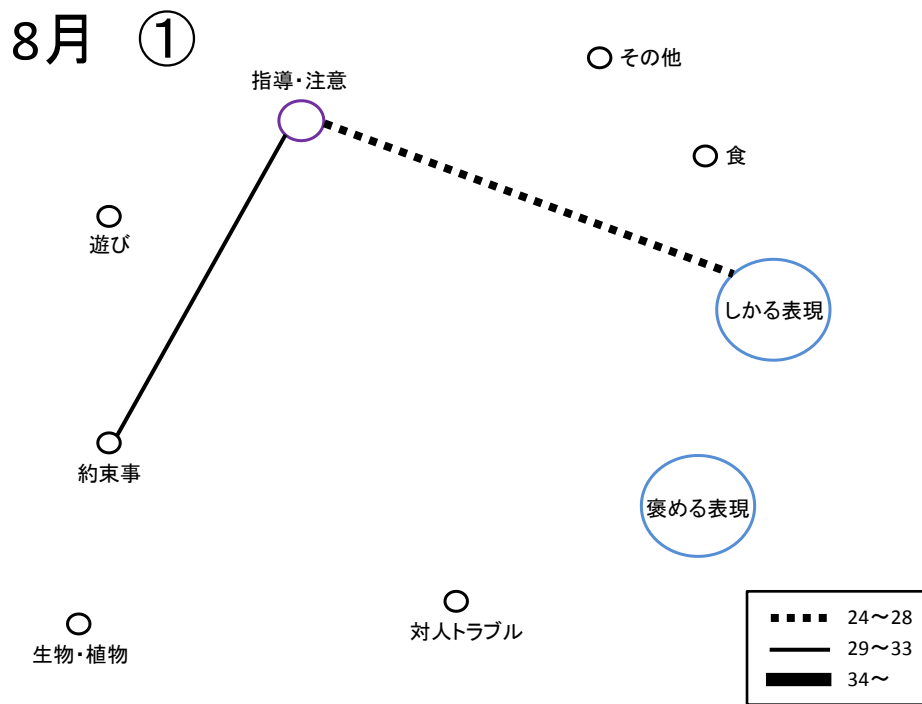


図 3-34 8月①(8/2~8/10 7日間)

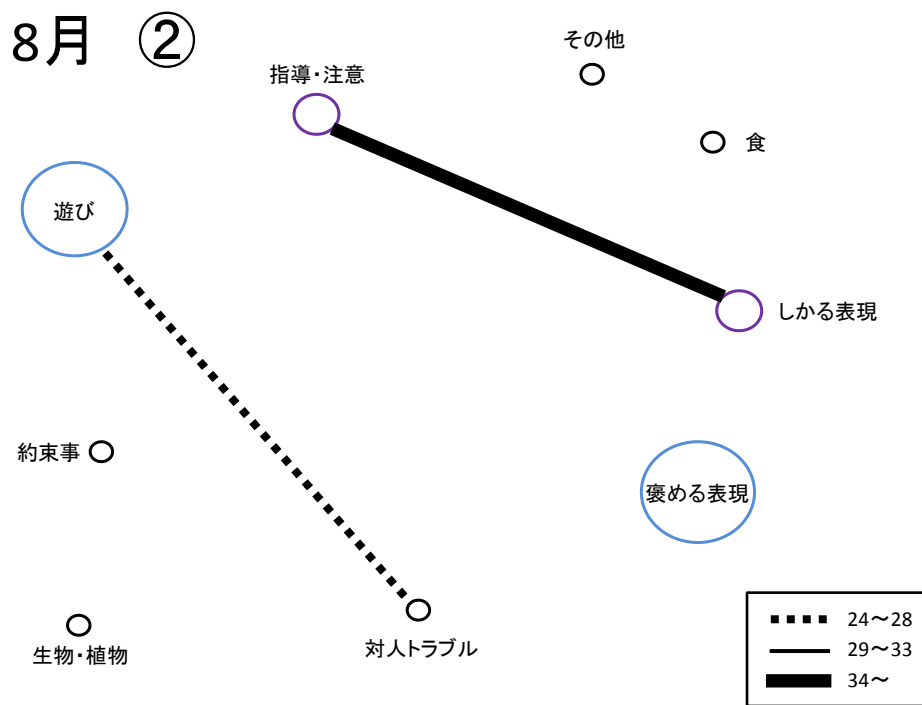


図 3-35 8月②(8/11~8/23 7日間)

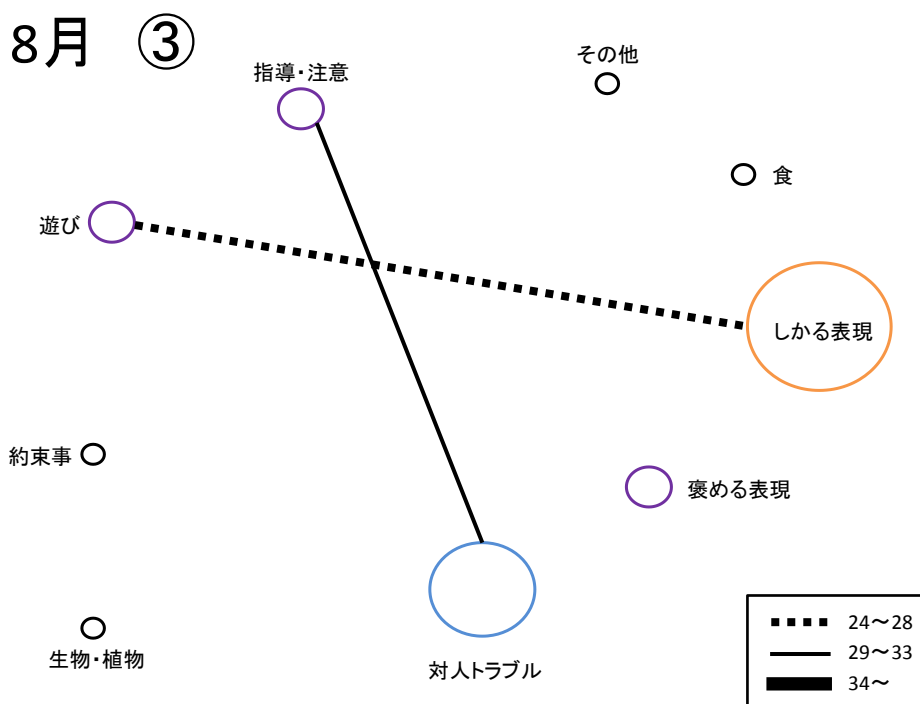


図 3-36 8月③(8/24~8/31 6日間)

8月24日~8月31日の6日間の動向を図3-36に示す。

8月最後に行われる、T児童クラブのイベントのため、縦割り班をつくり、グループワークをするため、児童はいつもの友達とばかり関わることができないため、『勉強の時間に〇〇君が△△君の消しゴムを取って、△△君怒って喧嘩になる。』等の様な対人トラブルで指導を受けることが多くなっていることが分かる。また、いつもの友達以外にも遊ぶ機会も増えるため、思ったことができない児童は不満のため、発散するために他の児童に乱暴したり、騒いだりすることもあり、しかられることも多くなっている。

3-6-5 9月

9月での全文章の数と、個人を表記された文章の数、男女比を表3-10に示す。

表 3-10 9月個人を表記された文章

	全文章	個人を表記された文章	男(回)	女(回)
9月	89	30	46	5
9月①	28	5	9	2
9月②	29	6	13	2
9月③	32	19	24	1

次に、9月の話題相関図を図3-37に示す。

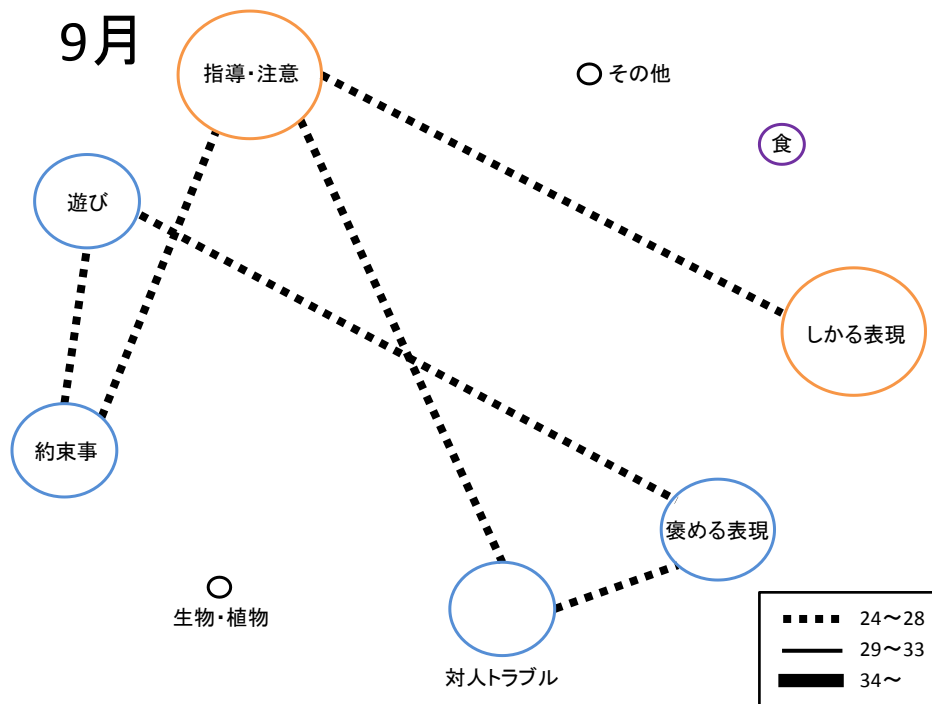


図 3-35 9月 話題相関図

9月は、運動会や音楽会などの全員で同じ動きをする行事が多く、それが児童にとってストレスとなることがある。また、9月の後半には、個人を表記された文章が非常に多いことも特徴的である。

以下、9月を6日間、6日間、7日間に分けた話題相関図を図3-38、図3-39、図3-40に示す。

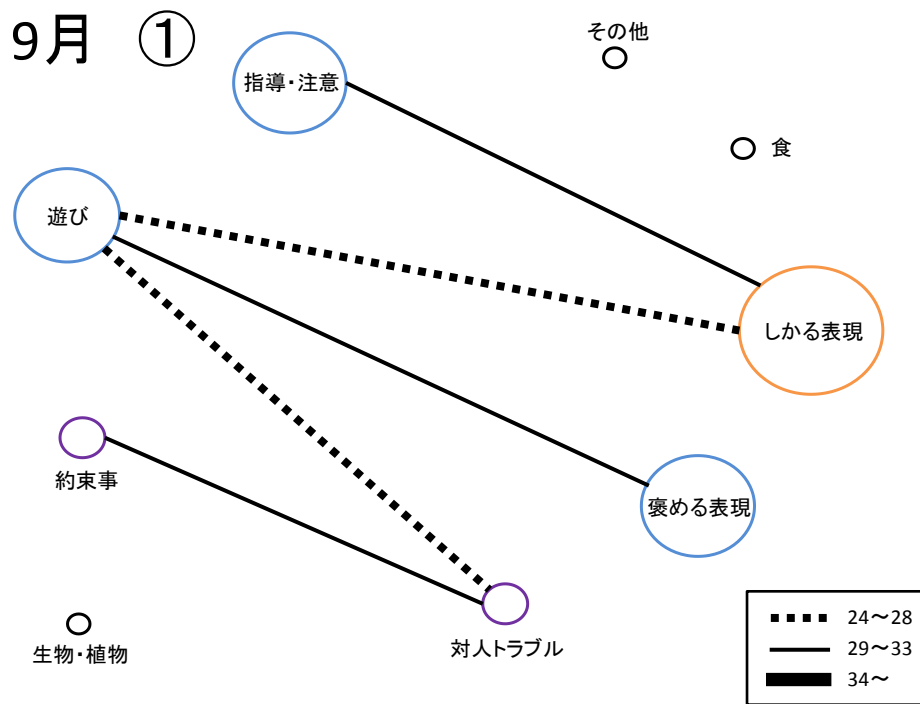


図 3-38 9月①(9/1～9/8 6日間)

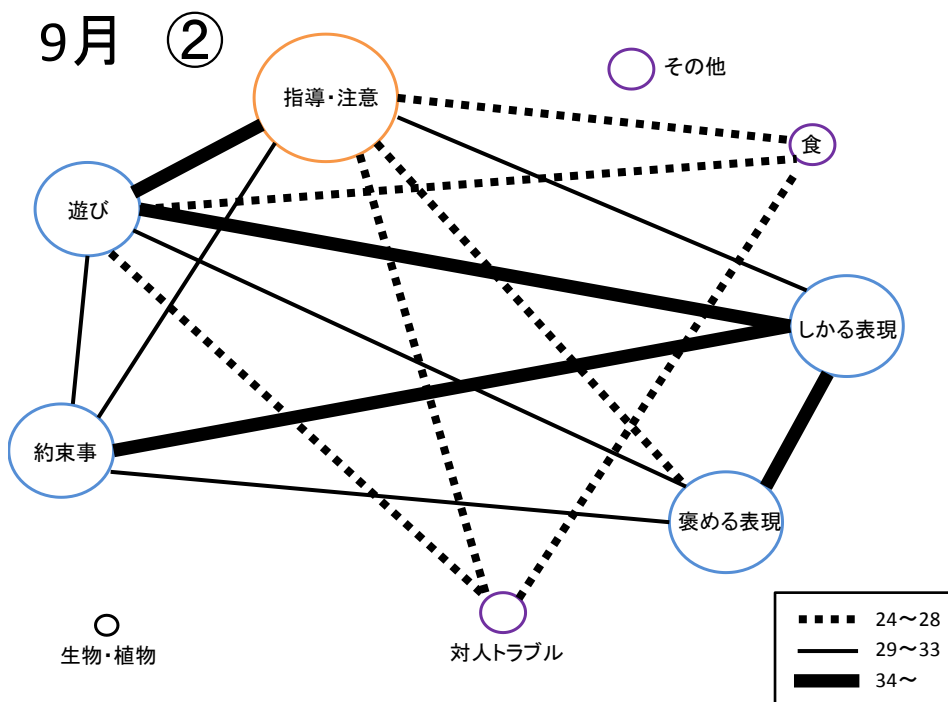


図 3-39 9月②(9/9～9/16 6日間)

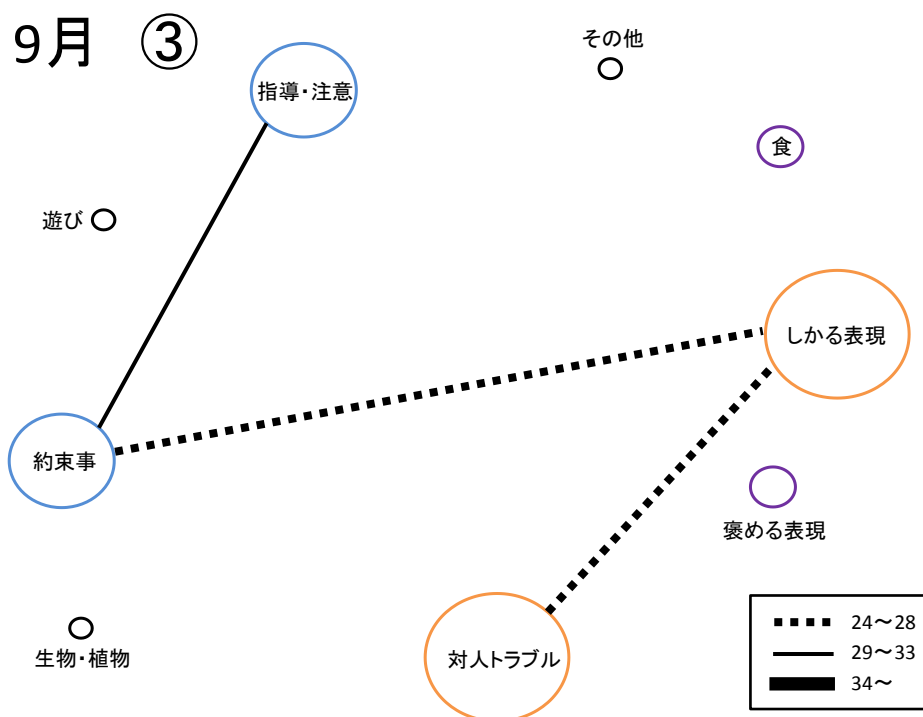


図 3-40 9月③(9/17~9/30 7日間)

9月9日~9月16日の6日間の動向を図3-39に示す。

9月に入ると、運動会の準備や練習で、児童の気持ちと体力が激しく消耗される。その影響で、毎日、指導を受けたり、問題が起きたりする事象が目立つ。「しかる表現」から「遊び」と「約束事」に強い相関が出ているのはそれが理由である。しかし、同じ日に「褒める表現」の話題が良く出現する傾向にあることから、良い評価も悪い評価もバランス良く記述されていることが分かる。

次に、9月17日~9月30日の7日間の動向を図3-40に示す。

この7日間では、記述されている内容が、個人の問題ごとやその評価に偏っていることが分かる(表3-11)。これは、運動会も終わったことで児童の気持ちが緩んでいることを指導員が危惧していることが原因であると考えられる。

3-6-6 10月

10月での全文章の数と，個人を表記された文章の数，男女比を表3-11に示す．

表 3-11 10月 個人を表記された文章

	全文章	個人を表記された文章	男(回)	女(回)
10月	93	22	37	3
10月①	29	7	15	3
10月②	30	5	9	0
10月③	34	10	13	0

次に，10月の話題相関図を図3-41に示す．

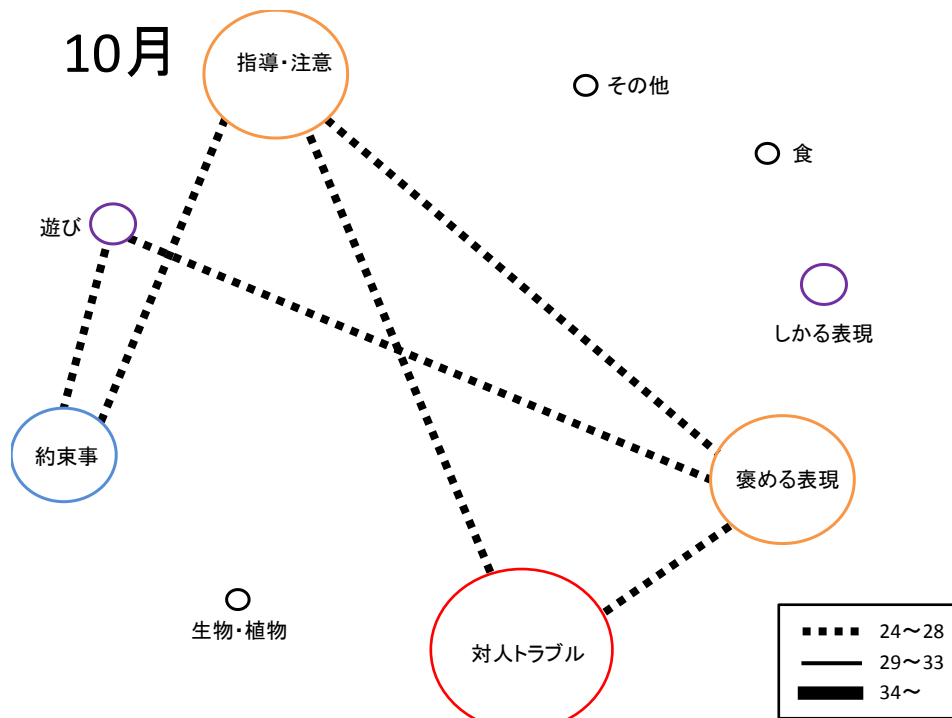


図 3-41 10月 話題相関図

10月には遠足で学校の外に出ることが多く，その影響で疲れた状態で帰ってくることが多い．それによって，友達同士でトラブルが生じることが目立っている．

以下，10月を6日間，6日間，7日間に分けた話題相関図を図3-42，図3-43，図3-44に示す．

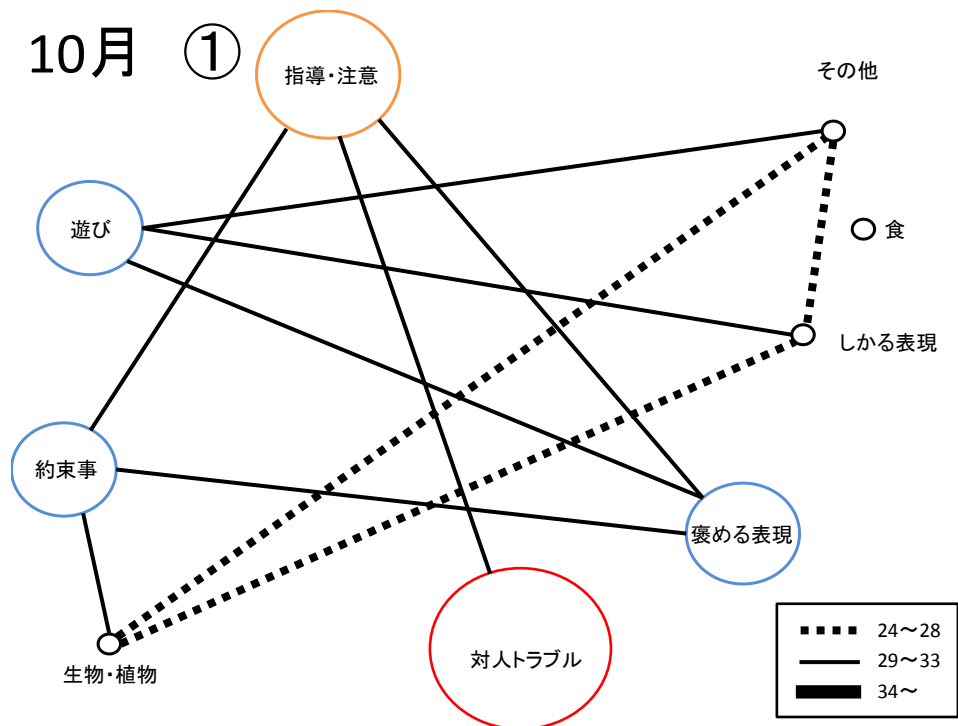


図 3-42 10月①(10/1~10/8 6日間)

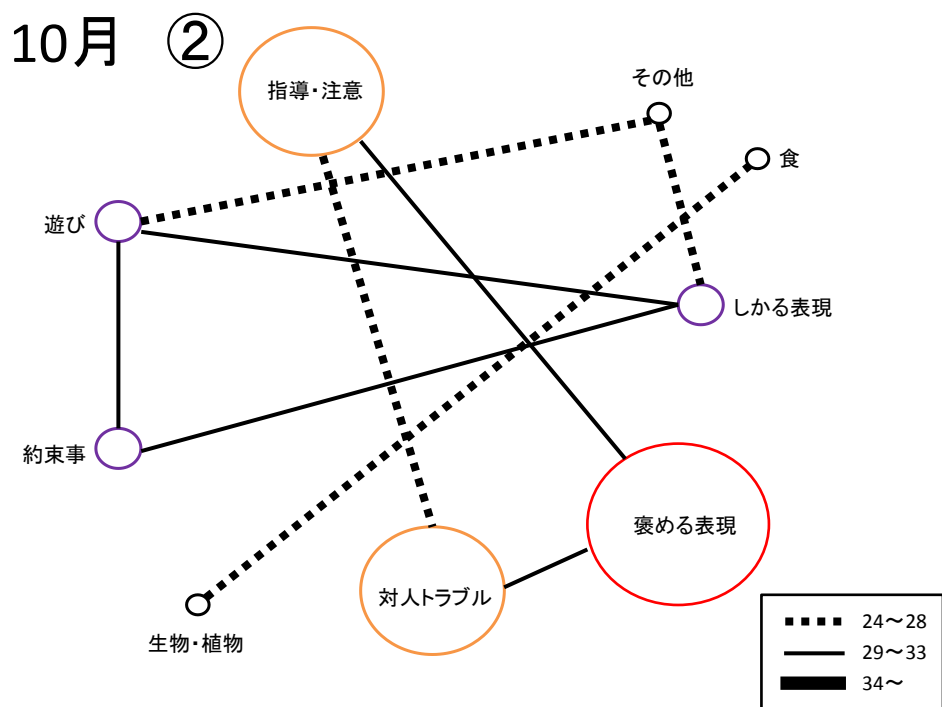


図 3-43 10月②(10/12~10/20 7日間)

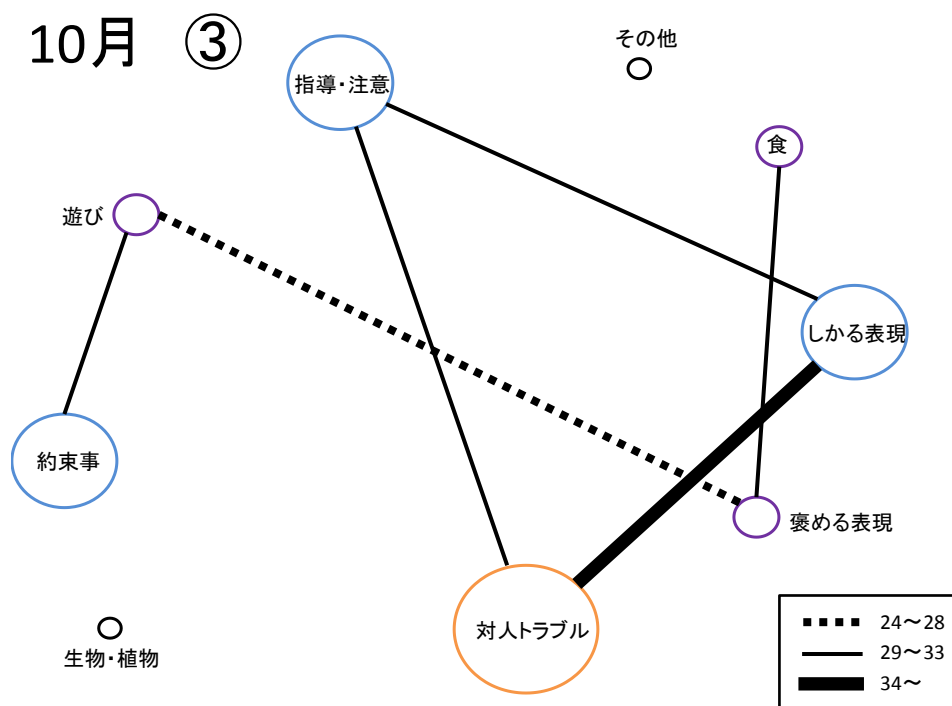


図 3-44 10月③(10/21~10/29 7日間)

10月1日~10月10月8日の6日間の動向を図3-42に示す。

10月に入ると、音楽会の練習が増えてくるため、児童は疲れた状態で帰ってくる。その影響からか、「対人トラブル」の出現数が非常に多い。「しがる表現」の出現数が少なく、「褒める表現」に関する話題が多いことも特徴的である。

次に、10月12日~10月20日の7日間の動向を図3-43に示す。

この7日間は「指導・注意」「対人トラブル」「褒める表現」のカテゴリーのみに偏って出現している。また、指導をしたり、対人関連のトラブルを記述したりした際はほぼ毎回、児童の良い評価をしていることが分かる。出現回数が多い3つのカテゴリー以外のカテゴリーの出現回数が非常に少ないことから、1つの事象に関して状況などしっかり書けていることも分かる。

次に、10月21日~10月29日の7日間の動向を図3-44に示す。

10月下旬は、音楽会や校外学習、遠足などがあるため、児童は疲れた状態で放課後児童クラブに帰ってくることが多く、喧嘩や物の取り合いなどで指導を受けることが多い。

3-7 ヒアリング

本研究で用いた日報の基礎情報や書いている特徴について、指導員へのヒアリングで補足していく。

(1)基礎情報

・日報には児童のプライベートなことも載せることもあるため、全ての指導員に見せることをしない。その内容を、日報を記述している2人の指導員が読み、その内容で先日の内容を踏まえながら他の指導員と情報共有をしていた。

1)5月下旬の話し合い…教師と指導員とで児童の現状や、指導方針に関してのすり合わせが行われる。小学校と放課後児童クラブとで指導方針を統一することが目的である。

2)特に児童が落ち着かない時期…夏休み前と9月の行事の準備期間特に児童が落ち着かなくなる時期である。夏休み前は、楽しみすぎるあまり指導員の話が聞こえていなく落ち着かない。9月は運動会や音楽会の練習で周りに合わせて同じことをするという行為によって児童はいつもより疲労やストレスを溜めて放課後児童クラブに帰ってくるのが原因であると考えられる。

(2)情報共有の仕方

・指導員間の情報共有の主は、口伝えで行われる。

3)夏休み…日報とは別にノートを用意していた。しかし、数名の先生は、入れ替えをあまりしないため、ノートより口伝えで情報共有していた。

(3)書き方の特徴

・褒める表現が多い個所は、運動会や音楽会、夏休み前など、特に児童が落ち着いていなかった時期である。児童が落ち着かず、問題ごとばかりが目立ちそうな時は、放課後児童クラブ全体の雰囲気が悪い印象に見えてしまう記述傾向になりそうなので、良いことも記述してバランス良くしようとしていた。

・バランス良くするのは、日報を市役所に提出するからである。市役所は日報上での各放課後児童クラブの動きを読んで、各放課後児童クラブが機能しているか、苦情が来ていないか等を確認していくので、指導員は、日報で問題ごとばかり目立つような記述をしない。

3-8 考察

3-8-1 個人の出現率

出現している児童と出現していない児童に大きな差があった。出現している児童の大半が男子児童であり、多く出現している児童は、3年生のよく喧嘩や問題ごとを起こすような児童であった。特定の児童についての指導状況と見通しは読みとれるが、その他の児童の指導状況と指導の見通しに関しては読み取れない。各児童に対しての指導の見通しや状況

を記述するという目的から見ると、再考すべきだと考える。

3-8-2 話題ごとの単純集計

話題ごとの単純集計の結果、日報の持つ特徴として以下のことが考えられる。

(1)表現の傾向

「褒める表現」に表現方法の特徴が顕著に見られた。『楽しむ』という言葉が他の言葉より非常に多いことだ。本文中で『今日は、各学年とも楽しく過ごすことが出来ました』という様に表現されることが多く見られる。それに加えて、「褒める表現」内での他の言葉の少ないことも目立つ。以上より、児童に対する褒め方に関して、日報上では記述しにくいことが分かる。

それに対して「しかる表現」に関しては、『ふざける』、『落ち着かない』、『騒ぐ』等、様々な表現方法が用いられており、様々な場面でしかる評価をしていることが分かる。

(2)時間ごとの記述の傾向

時間ごとで分けてみると、遊びの時間・宿題の時間・おやつの時間、と全ての時間についての情報を載せられている時期が多い。放課後児童クラブでの時間に沿って、それぞれ記述されていることも分かる。

3-7-3 話題相関図

日報を相関図にしてみたところ、指導員は、児童クラブ内での生活だけを見て児童を評価しているのではなく、小学校の行事や、教師の指導方法によって影響される児童の疲労やストレスを読み取れていることが分かる。これは、指導やしかる表現の出現率や他の言葉との繋がりの強さから分かる。

「しかる表現」、「褒める表現」のどちらともが出現回数が多い期間がないことから、期間によって、児童に対する評価がどちらかに偏っている傾向が見られる。しかし、児童に対して良い評価も悪い評価も出来ていると考えられる時期もある。

以下が期間ごとで見られた特徴である。

(1)9月中旬・7月上旬

夏休み前や9月に行われる運動会や音楽会の準備期間の時期は、図3-20で分かるように「しかる表現」と「褒める表現」の出現回数は同じであるし、また、「しかる評価」-「褒める評価」間で強い相関がある、つまり同じ日に児童の様々な評価がされていたことから分かる。もっとも、これは特に児童が落ち着かなかつたと指導員が判断している時期であり、児童の起こした問題やトラブルが目立つため、それを目立ち過ぎないように児童の良い部分を書いていったという指導員の書き方が影響していると考えられる。何を記載するか

基準に、「日報を読んだ際の印象」が入ってくることは、現場の放課後児童クラブで活用するには不必要な要素であると考える。

(2) 5月下旬・9月中旬・10月

5月下旬の指導員と教師での話し合い、9月の運動会や音楽会、10月の遠足、と学校生活で変化の多い時期には、児童はストレスや疲労を溜めて児童クラブに帰ってくるため、児童クラブ全体的に落ち着かず、問題ごとが多くなる。それは、「しかる表現」の出現数が多いことや、また「しかる表現」と「約束事」や「遊び」に強い相関が出ていることから分かる

(3) 6月上旬・9月下旬

運動会や音楽会等の様に継続的に児童の生活に変化が起きる時期の終わる、6月と9月後半には、一つの事例の説明が長かったり、個人の記述が多かったり、じっくり評価考察している傾向がある。これは、普段の生活に戻ることで、児童の気持ちが緩むことを指導員が危惧していることが原因であると推測する。

第四章 結論

4-1 各章のまとめ

ここでは、第一章から第三章までの内容と結果をまとめる。

第一章では、放課後児童クラブの定義に始まり、本研究の背景である放課後児童クラブの歴史や課題点について触れ、放課後児童クラブの課題解決の一助となる「日報」の意義について述べた。また、本研究がどのような立場に位置するか、本研究の目的、意義についても述べた。

第二章では、本研究の手法について述べた。

本研究では日報に記載されている言葉から、指導員から見た視点である放課後児童クラブ、つまり日報内の情報を把握するために、日報上の言葉をカテゴリー分けし、集計するとともに、話題想起を算出し、一定期間ごとの話題相関図を作成する。また、男女比や個人名の出現数、カテゴリー内の言葉を集計することで具体的にどのような内容が多く記述されているか把握するという点について述べた。

第三章では、個人名の記述量を集計と話題ごとの集計、話題相関図の作成をし、ヒアリングで補足情報を入れながら考察を行った。得られた結果は以下である。

《個人名の記述量の集計で分かったこと》

- ・出現している児童の大半は男子児童である。
- ・多く出現している児童は、3年生で問題ごとをよく起こす児童である。
- ・全ての児童の指導状況と指導の見通しに関しては日報では共有できない。

《話題ごとの単純集計で分かったこと》

- ・「褒める表現」は日報上では記述しにくい。
- ・「しかる表現」は様々な表現方法で記述されており、様々な場面で使われている。
- ・「約束事」に関しては、細かく記述されている。
- ・遊びの時間・宿題の時間・おやつの時間、と全ての時間についての情報を載せられている時期が多く、放課後児童クラブでの時間の流れに沿って記述されている。

《話題相関図から分かったこと》

- ・指導員は、児童クラブ外での出来事も踏まえた上で児童を評価している。
- ・「しかる表現」と「褒める表現」は、日報を読んだ時の印象が偏らないようにバランスをとるように記述されていた。

- ・夏休み前や 9 月に行われる運動会や音楽会の準備期間の時期は、特に上記のような傾向であった。
- ・運動会や音楽会等の様に継続的に児童の生活に変化が起きる時期が終わる頃は、1つの事例の説明が長かったり、個人の記述が多かったり、じっくり評価考察している傾向がある。

4-2 日報の現状・記述されている内容の特徴

前章の分析および考察から、現在の日報で記述されている情報や指導員の記述方法について見られる特徴について、以下の事が推察される。

4-2-1 個人に対する指導について

個人に対して指導した内容を、全員分記述できていないため、情報共有としては不十分であると考えられる。しかし、対象の放課後児童クラブでの主な目的は個人個人の対応を丁寧にかくというのではなく、放課後児童クラブのその日 1 日の大きな流れを記述することであるため、放課後児童クラブ内の前日の流れの把握という本対象地での「日報」の意義としては問題ないともとれる。

だが、上記の書き方だと、第一章で述べた「学童保育の生活の中で子どもの姿をとらえ判断し、働きかけをしていく指導員としての力量を育むため」、「現状や問題を整理分析することによって今後の保育の見通しをつかんでいくため」、「指導員の仕事を確立していくため」の3つの日報の目的は達成されていない。

複数の児童、特に男子に記述が偏っていたことから、現在の日報で全ての児童に対して、指導員が働きかけできていたのかは確かではなく、今後の保育の見通しをつかむことは不十分であると考えられる。

口伝えでの情報共有は、日報での情報共有より確実に情報は伝わるが、87人の児童の状況や問題を20人の指導員で共有することを口伝えで連絡することは難しいのではないかと考える。

4-2-2 項目や表現の記述傾向について

日報に記述されている内容の特徴として以下の様なことが挙げられる。

- ・指導員は、児童クラブ内の生活だけを見て評価しているのではなく、放課後児童クラブ外での出来事(小学校での行事や教師の指導方法等)に関して踏まえた上での評価をしている。
- ・放課後児童クラブでのタイムスケジュール(おやつ・宿題・外遊び等)に合わせて記述されている。
- ・『楽しむ』という表現が児童に良い評価をする際によく使われているが、『楽しむ』という言葉は曖昧表現過ぎて現状把握として適切であるとは言い切れない。

- ・「褒める表現」に対して、「しかる表現」の方が多くの場面で使用されている。
- ・「約束事」に関しては、細かく記述されていることが分かる。（『帰ってきたら宿題をする時間』や『時間になったら部屋に入る』などの約束事のチェックができています。）
- ・時期によって評価のバランスを考えて記述している傾向が見られた。

悪い評価に関しては、指導員自身で印象が偏りすぎないようにするために、運動会や音楽会の練習が厳しかった次の時期は「しかる表現」を少なくしたり、同じ日に褒める表現を記述するようしたりと、日報を読んだ際の印象を意識して話題を選んでいたようである。

- ・書ける内容を全て記述するのではなく、記述する内容を指導員が選ぶ。

限られた記述スペースで現状を報告するには大きな事象しか取り扱うことができないこと・市役所に報告するには各児童の細かい指導方法などを書く必要がないこと、が理由として考えられる。

4-2-3 市役所の求める日報と現場で活用できる日報のずれ

前章で述べたように、日報を読んで市役所は各放課後児童クラブの動き等確認している。つまり、市役所が求める情報というのは、児童クラブ全体としてどのような雰囲気や活動して、どのような指導をしているのか、保護者から来る質問や意見に対応できる範囲の情報があれば十分だということである。そして、記述する際に、市役所からの要望を優先してしまうため、指導員の能力の向上や児童の保育の見通しを立てるために必要な情報を載せる優先順位が下がってしまう。

つまり、市役所の求める日報と、実際に働いている指導員が求める情報にはずれが生じていることが分かる。

4-3 指導員にとってより良い日報の要素の提案

そこで、行政の定める日報とは別に、指導員間の情報共有のツールの提案ができるのではないかと考えた。

付加する情報は以下である。

- ①各児童に対する評価
- ②指導した方法と児童の対応

①は、現状や問題を整理分析することによって今後の保育の見通しをつかんでいくために現状に補足する形で、②は指導員の仕事を確立していくために、それぞれ加え、各児童クラブで実践しやすい方法で行っていくことを提案する(図4-1)。

図4-1は、三重県の「かんたろう学童保育¹⁾」での日報の記述方法を参考に作成した^{2), 3)}。

横に時間軸を、縦に児童名を記述してあるフォーマットを用いて、各指導員の見ていた

児童について記述できる項目に関してのみ、記述していく。指導員の担当児童を設けたり、班分けしたりするなど、全児童を見やすい方法も考えられるが各児童クラブによって最善の方法は異なるため、固定はしないが、全ての指導員で全ての児童を見ていることを確認できることも指導員の意識の向上の上でも重要であるので、各児童で項目を作って記述していく。

提案する日報を毎日記述していき、それを基に行政に提出する日報を記述していくことが可能であり、今回対象とした放課後児童クラブの場合では、提案する日報を見ながら、正職員の指導員が報告事項を記述していく方法ができるのではないかと考える。

また、日報上で共有しきれない情報に関しては、定期的にミーティングを行い、指導員全員で児童に対する情報を共有していくことが望ましい。

比較のために、従来の日報のフォーマットを図 4-2 に示す。

月 日 曜日				指導員											
日時															
在籍人数		1年	人	2年	人	3年	人	その他	人	計	人	出席	人	欠席	人
宿題(様子)		児童の反応・評価		おやつ		児童の反応・評価		外遊び		児童の反応・評価		中遊び		児童の反応・評価	
児童①															
児童②															
児童③															
児童④															
児童⑤															
児童⑥															
児童⑦															
.															
.															
.															

図 4-1 提案する日報のフォーマット

月 日 曜日				指導員											
日時															
在籍人数		1年	人	2年	人	3年	人	その他	人	計	人	出席	人	欠席	人
指導状況															
児童の様子															
特記事項															

図 4-2 従来の日報のフォーマット

4-4 本研究の限界と課題

本研究の分析方法(話題分類)は、筆者の主観で行うしかない。基準を設けても主観が抜けきらず、いつ・誰が行っても同じ結果が出るとは限らない。第三者の立場で行える分析方法の検討が必要である。

また、本研究の対象は、彦根市の放課後児童クラブのみであった。他の地域での日報を用いて項目の違いによる比較考察を行うことが望ましい。

参考文献

- 1)全国学童保育連絡協議会：第36回全国学童保育指導員学校西日本滋賀会場受講のしおり，2011-6-25
- 2)吉村政子，2011-11-07，電話

注釈

- 3)日報の項目は、縦軸に全ての児童の名前を、横軸に「おやつ」や「外遊び」など、時間軸に沿って気付いたことを気付いたときに記述していく。また、4人体制で記述していき、書ききれない場合は、次の日に書きたすこともある。また、月に1回、いつもより早く指導員を集めて、指導方法や児童の様子についてのミーティングを設ける。

Appendix

1. 全国学童保育連絡協議会 <http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/>

The screenshot shows a web browser window displaying the homepage of the National Children's Day Care Association. The page is in Japanese and features a blue header with the title "学童保育ってなんですか？" (What is Children's Day Care?).

学童保育ってなんですか？

働く女性が増えたり、核家族が増えているなかで、共働き家庭や母子・父子家庭などでは、小学生の子どもたちは、小学校から帰った後の放課後や、春休み・夏休み・冬休みなどの学校休業日には、親が仕事をしているために子どもだけで過ごすこととなります。

このような共働き家庭や母子・父子家庭の小学生の子どもたちの毎日の放課後（学校休業日は一日）の生活を守る施設が学童保育です。学童保育に子どもたちが安心して生活を送ることができることによって、親も仕事を続けられます。学童保育には親の働く権利と家族の生活を守るという役割があります。

学童保育に通う子どもたちは、そこを生活を営む場所として学校から「ただいま」と帰ってきます。学童保育では、家庭で過ごすのと同じように、休息したり、あやつを調べたり、友達とも遊びます。宿題もしたり、お掃除をしたり、学童保育から交通の家や公園に遊びに行きます。学童保育に一度帰ってきて塾に行く子どももいます。学童保育は子どもたちにとって「放課後の生活の場」そのものなのです。

今日、共働きや、母子・父子家庭などが増え、「働くことと子育てを両立したい」との願いが広がり、「うちの地域にも安心して子どもを入られる学童保育がほしい」という声はますます大きくなっています。

学童保育は地域によっていろいろな呼び名があります

＊『広辞苑』（岩波書店）『大辞林』（三省堂）『日本国語大辞典』（小学館）『現代用語の基礎知識』（国民文化社）『日本大百科全書』（小学館）『世界大百科辞典』（平凡社）など多数の辞典類にも「学童保育」として紹介されています。

地方自治体によっては、「学童クラブ」、「留守家庭児童会（室）」、「児童育成会（室）」、「子どもクラブ」、「児童ホーム」、「ひまわりクラブ」など呼び名はさまざまです。

国（厚生省）は、学童保育を必要とする児童を「放課後児童」、学童保育のことを「放課後児童クラブ」と呼んでいます。

学童保育の歩み

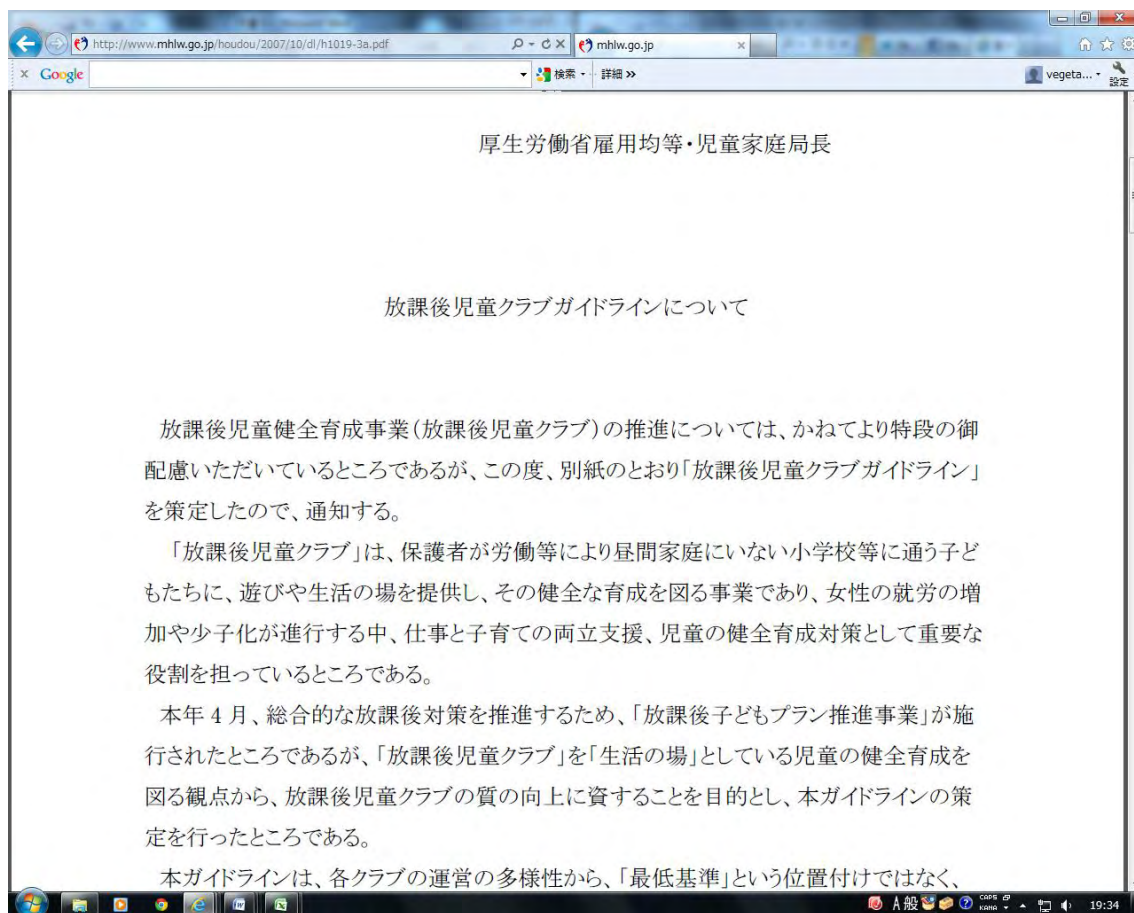
当初、学童保育は、必要とする人々が自分たちで行っていました。それがだんだんと普及・定着し、市町村が行うもの、法人が行うもの、運営委員会が行うもの、父母が自分たちで行うものなど、現在のような多様な形態になってきています。

日本における学童保育の歴史

1962 昭和37	＊戦前にも神戸市や東京などで学童の保育がされている例があった ＊1940年代後半から各地の民間保育園などで学童保育が始まる ＊1950年代は東京や大阪を中心に公立保育園や私立児童館などでも学童保育が始まる 東京の学童保育連絡協議会発足
1964 昭和40	東京の学童保育関係者が第1回の学童保育研究会を開催
1966 昭和41	文部省が留守家庭児童会補助事業を開始（300か所、予算5000万）
1967 昭和42	第2回学童保育研究会に参加した各地の関係者で全国学童保育連絡協議会（以下、全国連絡協議会）発足（以後、毎年、全国連絡協議会が全国研究会を開催）
1971 昭和46	文部省は留守家庭児童会補助を71年度で打ち切り「校庭開放事業」に統合
1972 昭和47	東京都が3か年計画で学童保育指導員の正規職員化を決定
1973 昭和48	全国連絡協議会が国に制度化を求める第1回国会請願（署名数10万余名）

総理府『婦人問題総合調査報告書』が学童保育の制度化を提言／全国連絡協議

2. 公正労働省発表 放課後児童クラブガイドラインについての報告書 <
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/10/dl/h1019-3a.pdf> >



3. 実際に彦根市で使用している日報(個人情報に関わる記述については黒塗り)

10月1日 曜日												10月4日 曜日											
出席者						欠席者						出席者						欠席者					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
33	28	26										33	28	26									
計 87						計 70						計 87						計 75					
出席者						欠席者						出席者						欠席者					
33						17						87						12					
指導状況	<p>外溢がから帰ってくる時に木のぼりをしてしまった子も たまたまなかありず、おやの時間かちがいでいるのに ダラダラに教室に帰ろうとばかりたまたま指導した。 金曜日なので荷物が多く、お荷物もなおりに指導した。</p>																						
児童の様子	<p>1年生の男子たちば、バツ、カマキリなどを取って ふくの中に入れ、教室でもおんじと大車に持てこた 3年生の男子たちが帰って来て、リコーダーやピアノを吹いて 宿題の時間にも吹いていた。 [黒塗り]さんが自分で作ったブロックを最後までとさんと かたづけしてくれた。</p>																						
特記事項	<p>今日は朝から雨だったのが、くつ下の始末子も連 くつ始末子も道路が狭く、帰る時が「ぬすてん」と とやいなから大騒ぎした。 外道に出ると水たまりがたかさん出来ていて 子と運ばせてもうれしそうにとうろこ運ばせ 舞しこんでいた!! とてお水たまりをえんえんお場所 うれそう お騒ぎしてくつもついで遊んで いた。みんなの顔が天下一品であった!! 暗闇に入りおに、お童外の [黒塗り] ちゃんとお童の [黒塗り] 君とブランコのお場所でおいおいになり、おんじ 大きくおんじて、 [黒塗り] ちゃんのおんじも来て 「おんじのおんじはおんじのおんじとおんじのおんじ おんじのおんじ、 [黒塗り] とおんじ、おんじにおんじ なり、おんじのおんじ、おんじのおんじ。</p>																						